

a missing person's press

夜でなく、夢でもない。

中田満帆

2023

これらは虚構であり、
現実するものとなんら関わりはない。

もくじ

夢のなかの同窓会	6
カスタマー・サービス	16
鳴歩きの正しいステップ	22
悪魔の私娼	30
アルパカを逃がせ	38
ペーパーナイフの冒険	44
砂漠	53
ボールのゆくえ	57
バナナな日	72
アルコールはもはや、	78
ニnfたちの晩餐	84
週末のラジオ	94
フットサルの現象學	101

宿營地——109

改行文字の入力はできません。——114

ビートルジュースの喇叭呑み——117

過去と現実——123

夜でなく、夢でもない。——130

著者來歴——139

I'm ashamed of the things I've been put through,
I'm ashamed of the person I am.

Joy Division "Isolation"

夢のなかの同窓会

*

たまらなくなつて、おれは懐^{おも}いだす、朝の早い時間を走る軽トラックの車窓、回収量の進歩を褒めてくれた業者の男、新聞紙と一緒にビールを何本もくれた、両手のない老人、おれにやさしく、身の振りを案じてくれた禿げ頭の老人、作業中に見つけた、ひとりの女の、30年にも渡る日記、そしておれを敵視して追いかけて来た、子供会のくそ老いぼれども、長雨の午後、道をまちがって京都までいってしまったこと、いまとなつて懐かしいすべての愚かさやなんか、みんなおれにとって教師だった。遙かな土地を飛びあがる、貴人のような時間たち……。

きょうの陽が落ちて、夏の熱波がたえまなく流れ、その澱のなかをひとり、夜になつて歩きだしたのは、けっきょく金が入ったから。おれはもう首だったけど、役職のナンバー2の男がおれに金を恵んでくれた。「なみはや紙業」をでて、歩きだしてしばらく、車がいちだい停まった。若い男女が乗ってる、かれらはおれに枚方の方向を訊く。おれは正反對のところを教えて差しあげた。かれらは礼をいって走り去った。通りに灯りは乏しく、まっすぐな道が不安にさせた。おれは瓢箪山の駅にむかつて、もはやひと通りもテーマ・ソングもないアーケードを抜ける、知らない路線の、知らない列車に乗る、巨きな男がそそり立ったままチーズバーガーにかぶりついて、ずっとこっちを見てる。やつがなにを考えてるか知らない。ただ眼を合わせないように我慢して、あとは中心街にむかつてゆられる。

くだらない仕事だった。古紙回収は利益にもならない。喰うものもままならないまま、日を過ごしてた。あるとき、タイ

ヤがパンクして、それでもおれは修理さえせずに仕事を放棄した。さらに免許の更新期限を過ぎてしまった。どうしようもない、あぁなつては首を待つかない。とにかくゆく宛はなかったけど、移動することしか、じぶんの存在がなり立たないような気がした。粘り着くような、汗染みの衣類、そしてだれかが気にかけるかも知れないじぶんの体臭のことなんかを考えながら、大阪本町までいき、そこから乗り換えて梅田に行く。馴染みのある風景が車窓いっぱいにひろがり、安堵した。実家に帰るだけの運賃を残して、おれは呑み歩いた。ウィスキーのポケットをやりながら繁華街をいった。おれは飲み屋街の片隅で、路上に坐って、やがて来るだろう、人生への、まったくの失望とともにして酒を呑みつづけてた。時間はもう遅い。おれはそのまま眠った。

ミツホやないか。

だれかが近寄ってくる。でも、その貌がわからない。存在がちかいというのに、それらしい感じがしない。臭いもない、音もない、かげもない。ただ黒々としたと、どんつきに立ってるだけのように見える。

そんなところでなにをやってるんや？

おい、こいつだれやねん？

おなじクラスにずっといた、ナカタってやつやねん。

へーっ、こいつ、酔ってんの？

そうらしいなあ。

まさか、連れてくんか？

どうやろ？

男たち、女たちの声がした。おれはいわれるがままにした。これは明晰夢だ。おれはこれが夢だってことを理解してる。

酒をいっぽん、そのまま呷って、立ちあがった。それにしても、なんと大勢なことだ。15人ほどの人間どもがかたまつて、なんの意志も感じさせない眼をしておれを見てる。軽蔑、侮蔑、嘲笑、不安、そして怒り、そんな感情がおれのなかにとぐろを巻く。なにをやってるんだ、きみらは。おれはこうして酒に酔って、今夜の壱を探すところだった。

おい、ミツホ来るか？

ああ、いくよ。――いくとも。

何人かが笑った。腹が立ったが、どうしようもない。おれは12の瞳のうち、3つを使っておれを見るのを遮った。データ回線がやぶられてる、単の、心臓が氷点下0度を下回るまで、きつとまだまだかかるのだろう。太平洋艦隊との連絡がつかないのは親父がおれを瞞し、そしておれの大切なものをすべて火にくべてしまった13歳のときからだ。おれはそれから絵を描くのをやめ、文藝に走った。だってパロールってやつは紙とペンさえあればできるからだった、廿日単と人間の戦いがあるって、塹壕のなかの酒席でおれは上座に降ろし、背囊を傍らに、注文を繰り返した、侵入を繰り返した、そして見た、虐殺されたハマチの切り身を、唐揚げを、馬刺しを、公共空間の切り身に添えられた、憐れな人間どもの哀歌、さりげないふりを決めてやってくる、無数の、男女の、嬌声の、共鳴。おれは乾杯もあげずにビールを飲み干す。だれかがおれを攻撃する。

やめろ、おれは吞みたいときに吞むんだぜ。

酒癖わるいな、おまえ。いつからそうなってるん？

12歳から。

え？

おれの脳味噌はもう腐ってるんだよ。

だれもが呆れた貌でおれを見てる。帆立のダンス・フロアで女たちはおれに冷たい一瞥をむける。どうせなら、このなか

からだれを撰んで、おまんこしたい。でも、ちゃらちゃらした醜女ばかりで、おれの面食いないちもつはピンともしない。
サイトウユリコはいないの？

いないよ。

なんだ、かの女はおれの初恋だったのにな。

おお、そうやったんか。

はじめて聞いたなあ。

それにしても、ここに集まってるのはどうでも半チクばかりだ。

なんやと。

ムラサキトルの貌が真っ青になった。おれは耳の穴から万国旗をとりだす。しかし、その旗にはおれの見てきたポルノ
動画のサムネイルが貼ってあって、おれは急に恥ずかしくなって、旗をテーブルの下に押し込み、なんでもないようなふり
で、もう1杯のビールを呑んだ。

あーっ、あたしのビール呑まんといてよ！

わるかったよ、カワイコチャン。

そういうの、やめて。

どうやら万国旗は見えなかったらしい。鋼鉄の痴女がおれを見守ってる。たぶん映画ってのは地平線を遮る唯一の手法な
のだろうなとおもって、おれは刺身に手を展ばした。まったく、どうかしてる。

いまさら訊くけど、なんの集まり？

同窓会やで。

中学の。

ドウソウカイ？——ちよつと待てよ、ジミー、どっかで聞いたことのある単語だ。綴りはdoh saw kaiだっけ。いいや、導想界だったような、ああ、でもこれが太陽神のお祭りだったのを、母方の祖母に聞かされて西脇の縁日にいったような記憶もある。たとえば房総半島でハマナスの唄を歌ったときの、映像や、記録系のまちがいだったり、そのほか大勢のエキストラが、それぞれの映像論を必ずしも持ち合わせてないときに使う符牒だったりすることが、最近の農家学と政治家との癒着で判明したってことをユリコから聞いたような、秋の罪深い景色と重なって見えてる、この情景こそがドウソウカイなんだ。

おれは呼ばれたことがないね。たぶん一生呼ばれないだろう。

でも、おれたちはこうしてミツホと呑んでるんやで？

そうはいつでもな。

タイムカプセルのこともあるしな。

え？

小学校さ。——おれは連絡を1年待ったよ。

おいおい、そんなこと蒸し返してどないやねん！

要するにおれは拗ね者、ってわけだ。

ミツホのいつてること、ようわからへんわ。

女が声をあげた。アサミヒサコというやつだった。

おれはもう24だぜ。淋しくもなるよ。

そうかもわからへんけど。

かの女は貌をうつむけたかとおもうと、ほかのやつにはほかの話を差し向けにいった。たぶん、透明の幕がおれを隔離してるんだ、艶のない、マットな質感の。そして透視図法の学習に失敗したおれはろくに風景画も描けずにいまに至る。いくらいい絵を見ようが、おれは負い目があって、それを直視できない。だからおれは画集を買わない。写真集しか買わない。絵画はおれの劣等感を刺激する。夜の公園で、父の叱責と折檻を怖れ、夜通し過ごした、15歳の1年が脳髓のなかでパツと散らばる。半円形に切り取られた、感傷が虚ろな満員電車のごとく過ぎ去って、丘のうえが淋しい。サム・シェパード、パード、ドーハ、ハーネスト、トロツキー、キーウエストのヘミングウェイよ、いままさに拡がる憎しみをどうしたらいいのか、教えてくれ！

ところでミツホは定時制にいったんやつけ？

おれは黙って肯いた。

カブで走ってるとこ、見たことがあるで。

おれは黙ったままだ。

ところで、絵えまだ描いてんの？ うまかったなあ。

おれは嘲った。

絵だって？ とつくにやめたよ。——美術部は追いだされるし、親父には絵も画材も燃やされてしまった。おれにはもう大切なものなんか残ってないんだよ！

たとえここにいる全員に憎まれようがおれに興味もないね。

それにあの美術部の連中と来たら、顧問のババアも含めてまるで救いようがない。

いかがわしい本を持ち込んで、嬌声をあげるくそつたれな雌豚どもだ。

あんなやつらにホッパーの筆使いや、

ムンクの作風の変遷についてなんか語ってもらいたくないね。

どうせ、恋愛すらできないオタク女どもに、

いったい全体、藝術のなにがわかってたまるかよ！

いい加減にして！

声をあげたのは見たこともない女だった。

あんたとおなじ美術部だったけど、あんたはまじめに絵を描いたことなんてないやない！

いつもすぐに帰るし、果てはひとの陰口なんか叩いて、

先生に追いだされたくせに！

それもたった2週間、――2週間やで！

ひとのことというまえにやることがあるやろ！

それまで回転をしてた基督像がとまった。機銃音がやんだ、深夜のニュース番組でナカタミツホが自殺を図ったと、ヘッ
ドラインが告げるのは、どういったわけだろうか。悲しいことなんかなにもないのにパンケーキにシロップがかけられ、や
がて浸透するのはいったい、どういう料簡だろうか。料亭の隅っこで臍を嚼む珍品堂主人のかげ。かれは店を乗っ取られた。
船長は昼食へでかけ、船員が船を乗っ取ってしまった。貝は淋しい。特別、二枚貝は。臨場のように、半額セールのように、
食べかけのハンバーグのようにいまはただ悲しい、悲しい、悲しい、悲しい。すべての夢は出来損ないのセックスの結果だ。
ゼロのなかでわれわれは協力しなければならぬ、でもおれは論外だった。おれは笑った。そうとも、おれには笑いが必要
なんだ。

すまん、冗談だ。

ほんの冗談だ。

あたしにはそう見えないけど。

かの女はうらめしそうな眼をしてる。でも、すぐにジョッキに顔を降ろした。機械的なリズムがする。はなればなれになったテンション・コードが不協和音を奏でるみたいにおれはそのリズムのなかに自身を埋葬させながら、ひとつひとつの科白をゆっくり、ゆっくりと、喋くってみた。

——ところで、おれはいま文なしなんだ、

オケラだ、

棲むところもないんだよ。

それがどうしたって？

だれかがヤジを飛ばした。ツダという長身の男だ。

きょう仕事を首になって、寮も追いだされて、困ってるんだ。

4千ほど貸してくれないか、一生のお願いだ、帰る家さえないんだよ。

家族には勘当されてるし、小さいころは折檻されつづけてな。

そう、中学時代は公園で寝泊まりしてたくらいだ、どうかわかって欲しい。

金は必ず返す。誓っているよ。

おれは臆病者だ、自殺さえできない。

だからきみに逢えてほんとううれしいし、この奇跡を大事にしたい。

うそこけや！

またしてもツダだった。

でもおれには必要なんだ、どうか頼む！

おれはトオルやヒロシをはじめ、馴染みにあるやつらの貌を見ながら喋った。草臥れ、もう仕方がないといった体で、3人が財布をだし、金を抜く。まさしく僥倖である。

いいか、ミツホ。

おまえはもうオシマイなんやで。

これつきり、もうおれたちのまえに現れるなよ。

蔑みのなかでトオルがいった。おれはもうどうでもよかった。西成のどやにでも行って落ちぶれるだけだ。そうおもった。たまにはこういう夢があってもいい。とりあえず、ハマチを平らげ、馬刺しを一切れ喰い、ふたとびビールを呑んでかれらとともに店をでた。おれたちは正反対にわかれた。だれもふり向かない。それもそのはず、かれらのバックパネルには仕掛けがあつて、冷蔵庫が回転しないように防御装置が働いてるからだ。アルミにも、ステンレスにも、青銅にも涙があつて、それを拭う布巾がないからといって、そのままにはできまい、きつと分裂作動のオートマティック車がかれらを導く標となつて、橋田壽賀子の腐りきった作劇のようにどぶ河の表面を滑走してるにちがいないのだから。そしておれは中之島を臨む河岸で、陸を引いて眠った。夢のなかで眠った。やがて黄金に緑青を溶かしたみたいな朝焼けを見た。駐輪禁止の柵のなかでおれはからだを起こして、強ばった全身を解す。ふいにポケットを探る、金が入ってた。なるほど、子供の靴紐を解くようにおれは人生を乗り切ることができる。そうだ、本を買おう。ジョン・ファンテでも買って、あたらしい作品について考えたい。おれは作家になるんだ。そんなことをもって、堤防のうえを、ワイルドサイドを歩く。あのふたつのコード、それ

がおれを導いたんだ。"And the colored girls go"—おれは口遊ぶ。"Doo do doo do doo do doo..."ってね。

そのときだった。足が滑って、おれは踏み外し、じぶんの歌声を聴きながら、水のなかへ、澱む河のなかへ落ちてった。"Doo do doo do doo do do doo..."——もうなにもわからない。どこからレモンの匂いが漂い始めた。これはいったいなんなのか、もしかすればこれこそ、おれがいままでずっと求めつづけてきた経験なのか。おれは泳げなかった。最期に泳いだのは13歳の夏だった。教師ども誘われて、落ちこぼれや知恵おくれどもと一緒に海へいったこと、遠い小島にむかって泳いだこと、溺れそうになったこと、そしてその旅をきっかけにカワチとかいう鮑だらけの醜いヤンキーにしつこくちょっかいかけられるようになったこと、それから国語の女教師の、過干渉ぶりなんかを懐いだす。暗い河で水死してから、しばらくおれはおれでないものを、おれのなかに見つけたような気がした。そうとも"Doo do doo do doo do doo..."だってね。

*

※作中の歌詞は、Lou Reed "Walk on the wild side"より引用。

*

《気づくと、おれは腹を押さえながら傘を差して、元町は、裏通りのガード下まで歩いてた。雨が激しかった。血はそれほどでてない。いまならまだ助かるというのにそこらで酒を呑み、最期に残ってる薬を3つもキメる。たまらない陶酔感と、刺激臭、そしてじぶんの血の色彩が自在性を持ちはじめ、酩酊した頭に衝撃が走る。これまでも欲しがってた、ある種の感動、そして詩的な死。虹鱒のなかで泳ぐ夢を見る、つかのまの出来事たち。おれは一瞬、歩道にうずくまった。だれかが声をかける。だれかがおれのなまえを呼ぶ。でも、そいつの顔が認識できない。こんな感じなのか、失貌症ってのは。それとも、おれのなかで他人を拒絶するなにかが作動してるってことなのか。おれはわからないままに立ちあがって、タクシーを呼び止めた。行き先は神鋼病院の精神科ということにした。やっぱり死ぬのは怖かったし、それに3つもキメたあとのトリップは正直最悪だった。カナエの分泌物がおれのなかで暴れだす。熊内通り5丁めに来たときにはもう失血で、弱り切ってた。運転手に金を渡し、着いたら、その金から精算するようにいった。まるで輪切りにされたボーイングが地上を離陸するような快楽の響きがおれの唇から喉元にかけて走る。タクシーも走る。坂をくだって、ガードを潜り、左折して、病院のまえまできた。運転手は入り口で停め、制帽を脱いだ。それはまぎれもなくカナエだった。おれは観念して死ぬことにした。そしておれは眼を瞑って。》

*

という具合にみじかい断片をつづった。カナエはもう眠ってる。おれはタイプと紅茶で、不眠症の夜を乗り切ろうとしてた。小説らしい、小説にはとつくに厭きあきしてたし、じぶんはその才能がないのにも打ちのめされてた。だからといって、書くことを諦めることにはならなかった。できなかった。見失った目標、そして好機にしがみつき、どこまでも終わらないダンスをつづける。世界をめぐるダンスを。

きょうでもうカナエとはおさらばだ。きのう、最期の愛液を蒸留ポットから取りだした。アルコールと、かの女の体液を混合し、蒸留させると液体麻薬が完成するんだ。おれはずっとそいつを売って生計を立ててきた。でも、ヒモぐらしには厭気が差し、一日じゅうずっとかの女を愛撫するのに疲れてしまってた。カナエへの愛情はまだ残ってる。あるいは愛情の骸や灰はまだ。でも、おれだって36で、かの女と出逢ってから7年にもなろうとしてる。かの女は26だ。もうたくさんだった。かの女はなんども間男をつくったし、金のために年寄りに抱かれもした。そのたびにおれの心は千々にちぎれたし、火傷をするみたいなおもいだった。でも、かの女はなんども蘇った。おれのもとに帰ってきた。それはけっきょくおれしか、かの女の体液から麻薬を精製することができなかったし、顧客のリストを持つてなんかなかったからだ。

世界は冷たい。氷上に舌を垂らすような、舌が凍りつきそうな年月が過ぎた。サツのほうはなんとか撒いてきた。でも、そろそろあたらしい規制が設けられるかも知れない。警察のほうではまだ注意喚起の段階だが、おれはもう充分すぎるほど儲けてる。おれのブツには興奮作用や幻覚作用こそあれ、どんな薬物検査にもかからない。20時間もあれば身体から完全に排出される。それでも顧客は増えつづけ、カナエはじぶんの取り分を巡って、あることないこといいふらすようになってしまった。あること、それはブツを希釈して第3者に捌かせて上前を刎ねること。ないこと、それはほかの女の体液からブツ

をつくってるってこと。なんども試みたものの、カナエ以外の体液で、あそこまでの効果を得ることはできなかった。カナエの愛液に可能性を見いだしたのは、酔っ払ったおれがワカメ酒をかの女に強いたとき、とんでもなく特別でヤッピースな感覚がおれを襲ったときだった。あるいは酒を呑みながらクンニしたとき、幻覚を見たときだ。おれは夜な夜な、かの女の体液を採取して、実験を繰り返した。それで生まれたんだKという麻薬が。てなわけでおれは薬物家業を長らくやってきた。でも、その時も終わり、顧客リストも焼いて、器具も棄てて、おれはまともになってやる。

書いてるの？

かの女が起きてきた。パンティだけをひっかけて、眼を擦ってる。

いいや、考えてたんだ。

ほんとうになにも書いてないの？

そうとも。――見るか？

いいの。

あなたが書いてないってゆってるから。

そのままかの女はベッドまで歩く。きのうはかの女も自身の体液でハイになってやがった。何杯もショット・ガンを呑み、ばか笑いに興じてた。おれは書きものを保存して、PCを落とした。それからひとり、シロツク・ウォツカをやりながら、鞆にリストや、精製についての覚え書き、そして希釈してない、まったくのオリジナル・ジュースを3つ入れた。これでよし。あとは夜明まえに出発するだけだ。

*

ひとはじぶんの虚無のなかに棲むことはできない、じぶんの快樂のなかで生きることもしできない、ひとはじぶんの諦観のなかで暮らすしかない。——そういった作家がいたっけな。おれはいま諦観のなかにあるのかはわからない。それでもカナエとの未来を諦めるということがいまたったひとつの希望ではあった。おれは酒を呑んで眠った。目覚ましはかけておいたはずだった。不定形の女がおれの室に忍び込み、大事なものをかっ攫ってゆく夢を見た。おれはそいつをおいかけてボール紙でできた車に乗る。コロラドからテキサスまで、行方不明の猫、「アメリカ」を探す依頼。不動産屋の娘・レイナが裸のまま殺される。新聞の星占いを見たが、糞犬座のおれは黒猫座の女に夢中になるあまり、シメ鯖座にある土地の仲買人を撃ち殺してしまうらしい。当然ながらコア・シガレットで。残年なことに今週末はジョンソン・フレドリック氏との面会は叶わないともあった。ラッキー・アイテムは漆器。ラッキー・カラーは本藍とある。なるほど、だからこそレインコートが必要なんだ。いつものように2週間でアスカから神戸まで帰って来られた。鞆のなかを探った、リストも覚え書きもない。おれは発狂寸前だった。カナエがあれを握ったら、かの女はもうまともな人生にはもどれない。おれが立ちあがった一瞬、カナエの声がした。

書いたよねえ、あたしのこと。

どうして？

逃げようたってむり！

気づくと、おれは腹を押さえながら傘を差して、元町は、裏通りのガード下まで歩いてた。雨が激しかった。血はそれほどでてない。いまならまだ助かるというのにそこで酒を呑み、最期に残ってる薬を3つもキメる。たまらない陶酔感と、刺激臭、そしてじぶんの血の色彩が自在性を持ちはじめ、酩酊した頭に衝撃が走る。これまでも欲しがってた、ある種の感

動、そして詩的な死。虹鱒のなかで泳ぐ夢を見る、つかのまの出来事たち。おれは一瞬、歩道にうずくまった。だれかが声をかける。だれかがおれのなまえを呼ぶ。でも、そいつの顔が認識できない。こんな感じなのか、失貌症ってのは。それとも、おれのなかで他人を拒絶するなにかが作動してるってことなのか。おれはわからないままに立ちあがって、タクシーを呼び止めた。行き先は神鋼病院の精神科ということにした。やっぱり死ぬのは怖かったし、それに3つもキメたあとのトリップは正直最悪だった。カナエの分泌物がおれのなかで暴れだす。熊内通り5丁めに来たときにはもう失血で、弱り切ってた。運転手に金を渡し、着いたら、その金から精算するようにいった。まるで輪切りにされたボーイングが地上を離陸するような快楽の響きがおれの唇から喉元にかけて走る。タクシーも走る。坂をくだって、ガードを潜り、左折して、病院のまえまできた。運転手は入り口で停め、制帽を脱いだ。それはまぎれもなくカナエだった。おれは観念して死ぬことにした。そしておれは眼を瞑って。

お客さん！——運転手が叫ぶ。男の声で。やがて病院のなかへ運ばれ、手当を受け、おれはベッドのうえでおれを運んだ連中を見た。全員カナエだった。おれはそのなかのひとりを捕まえて、首を絞める。やがてカナエ全員がおれを拘禁室へと運び込み、鎮静剤を打って眠らした。超高速度カメラで撮ったみたいに日が沈み、夜が来て、また日が昇った。つよい灯りが終日おれを照らしてる。四方の壁から、ひとの声がする。うめき声、叫び声、ひとりごと。あらゆる虚無のなかでむっともさむぎむしい、魂しいの荒れ野に踏み入れてしまったらしい。いったい、どうしたらいいんだ？

看護人が水をもってきた。無数の短い毛がなかに入ってる。おれは黙って水を呑んだ。それから2週間で、おれは閉鎖病棟へ移された。足の感覚がおかしかった。さらに3ヶ月して、開放病棟に移された。ほかの患者たちがいった。「やっとまともに話せるひとに出逢った」と。いくつかのひとびとと仲良くなった。さらに2ヶ月しておれは退院した。もとのヤサにもどった。家賃を払い、公共料金を払った。ベッドのうえにもうカナエはいなかった。それから1ヶ月しておれは引越した。

金はまだたんまりとある。もはや、かの女がおれを求めないということが少しだけ悲しい。でも、いまさらいえることはない。おれはこうやって小説もどきを書いて、少しばかり叙情することもできる。かの女ならきつと、おれがいなくともやっ
てけるだろう。おれはそう信じてる。

*

鳴歩きの正しいステップ

*

夢から醒めようとする反動のせいかな、挙動が少しおかしい。タクシーはエナメルできていて、とてもキュートだ。でも、おれでないだれかからの指令でとてつもない悪意に変わる。ポケットは空っぽ。なにもない空白のようで、おもわず眼をそむける。砂丘がつづく夜の街でたったひとりの男を見た。歩道橋からこちらにむかって叫ぶ。キャデラックの卵巣から電波を受信しました。何卒、よろしくお願いします。ナニトゾ。ひらかれた街区に車は駐まって、おれはそこで現実に立ち返り、その醜さに驚く。たじろいだおれの眼にきみは映っていただろうかと言ふ。せつかくの花がすべて枯れてしまったから、虐殺の支度をしよう。そうおもって、運転手にいった、

「警察を呼んでください」と。

おれは仮設の葺合署に連れて来られた。スーパーボインの、赫いところりセータの女がおれの腰紐をたどって、おれの身体的特徴を調べた。おれはかの女に卑猥なことをいったのだろう。エロチズムを感じた。連帯意識を持った男たちが色めき合っておれを非難した。威嚇した。かの女のおっぱいはほんとうにデカかった。ただし、顔がだめだった。いけない、いけない、もちろんこと、こんなことを書けば留置場にもどることになる。でも、おれはけっきょく、その場所にいた。

相部屋はヤク中の老人だった。丹波篠山市のうえ、小雨の降る町で、おれたちは束の間の仲間だった。朝になって病院に連れられた。おれの頭に複数の殴打痕があるからだ。でも、医者はすべてを嘗め腐った眼で調べ、おれは包帯もしないでだ

された。刑事もおれの前科をおもってか、なにもいわない。たしかにおれはきのう、おれの口座から勝手に金を抜いた父に怒って、タクシーで実家へゆき、喧嘩のすえに1万をせしめた。そして泥酔のなかでいくつかの駅を経て、正体不明のまま、タクシーに乗ってしまったんだ。気づくと金はない。おれは運転手に金がないからと、警官を呼んでもらった。以前の執行猶予から半年、おれには勝ちめなんか、なにもなかったんだ。

やがて日暮れたところになって警官が、おれを余所の留置場に移送した。丹波だった。若い男がふたりいた。ひとりはずっと眠っていた。もうひとりがうずうずとなにかをうかがってた。夜になって横になったていた男はだされた。おれとうずうずだけが残された。やがてうずうずが話しかけてきた。よっぽど不安だったらしい。細身の男で、背が小さかった。

おまえ、なんで入れられたんや？

詐欺だよ。

なにやったんや？

無賃乗車だよ。

なんや、そんなことか。

おまえはなんだ？

猥褻だつてよ。

それでな、相談があるねん。

示談にしたいんや。

手紙の書き方、教えてくれへんか。

やつが話すには相手の合意はあるのに、1年経っていきなり立件されたということだった。おれはやつの事情を聴きなが

ら、手紙の手解きをしてやった。ところが、話を進めていくうちに、やつが無理くり女をやったこと、そしてシャブをやりながらだったことがわかっておれは手を引いてしまった。口を濁し、やつがおとなしくなるのを待った。でも、おれたちは終日騒ぎまくった。ばかげたことをばかげた大声でわめき、愉しんだ。歌を唄い、猥談を繰り返した。やつは背中の刺青を見せた。焰に包まれた仏像が描かれていた。

おまえ、絵え描けるんやろ？

これ、描いてえな。

いいけど、いま眼鏡がなくなつてな。

ここであら描いてくれよな。

やつのばかげた話を聴くのはなかなか楽しいものだった。たとえば丹波の米は旨くて躍り食いができるとか、深夜になると仲間たちとバイクで町内をパトロールしているとか、サツの手入れがあったときの話だとか。やつは外車を3台も所有していて、妻と子供がいる。妻は薬物の持ち込みをきらっていたけど、あるときサツに踏み込まれて手入れを受けた。寸でのところでは冷蔵庫のバックパネルに1袋のシャブを隠し、なんとかやりおおせたらしい。地元では、堅気の職場に勤めながら、ヤクの運び屋と、大麻の栽培をやっていると話した。――大麻か、おれも吸ってみてえ。

まあ、少量のヤクなら駄にいいらしいからな。

せやろ！

おまえ、ええこというやんけ。

少しならええねん！

おれは黙っていた。

なあ、おまえ、ここでたら一緒に仕事せえへんか？

なんの？

運び屋、車で大阪いつて配達するだけや。

週給200万はかたいで。

ちょうど、おれの家、空いてる室もあるしな。

やつは妻から差し出されたケータイ小説の本をおれに指しだした。――「これに住所と連絡先、書けよ」。おれは書いて渡した。200万の魅力はとてでもないが抗えない。だが本気じゃなかった。

ここでたら連絡するわ。

まあ、やつがどうなろうとおれには知ったことじゃなかった。おれはテキトーなことを放言しては笑った。そしてガスを放った。やがて取り調べが始まり、われわれはそれぞれ別の監房に移された。取り調べじゃあ、おれが故意に詐欺をしたとさんざん詰められた。眼鏡でぶの刑事と、年寄りの禿刑事のコンビにさんざやりこめられ、さらに検察で拘束延長が決まってしまった。どうにも、やつらがいうにはタクシーのカメラに映ったおれがあまりにも冷静に見えるということだ。冗談じゃなかった。おれはいちどパニックになると、硬直してしまうんだ。嘘じゃない。

猥褻野郎の芦田信司はべつの房から、たびたびおれに声をかけて来た。おれのあたらしい室には西脇市の中年男と、足のわるいヤク中の老人がいる。終日点灯している灯りのもとで、おれたちはまた莫迦っ話をしていたし、やつはやつでまたぞろ、ほかのやつに示談にするための手紙の文案を、ほかの虜に教授してもらっていた。若いとか、幼いやくざ者も何人かいて、かれらとは朝になると出会うことになっていた。蒲団を片づけ、洗面所で歯を磨き、顔を洗うときに、そして喫煙にでるときに。だれも芦田以外に話す相手はない。おれはやつの服を見た。自慢げになって着ている服には漫画『ワンピース』

ス』のキャラクターがプリントしてあった。そんなものいい大人が着るものかとおもった。でも、ヤンキーたちほど、ああいったものが好きで、仲間を尊重するじぶんというものに酔っているのである。噫。

やがてみんな房に戻ると、やくざ話に花が咲く。山健組のことがたびたび話題にあがった。ひとりの男が饒舌に語る。そのときだった。左隣の監房から荒々しい声が聞えて来た。

さっきから山健のこと、とやかくいうてるけど素人にそんなこというてええとおもてるんですか？

うちら、なにも遊びでやってるんじゃないんや、口出しせんといってもらえますかあ。

さっきまで饒舌だった男は狼狽してわびる。

えらいすみません、

いえね、山健のひとたちってすごいなあって。

そやったら、なんで失礼なものいいすんねん。

いえいえ、そんなつもりはないです。

だったら黙っててもらえますか！

はい、黙ってます。

しかし男は亢奮状態にあり、やがて檻を撲って喚きだした。猿並みだ。警官たちが雪崩れ込む。口喧嘩が始める。警官たちは最初冷静だったものの、男の激しさに耐えかねたのか、最後には怒声をあげてしまっていた。やがて男は別室へと連行された。みんな無言だった。あたりに静寂が立ちこめる。口火を切ったのは芦田だった。

おれ、大麻育ててるんですよ。

若いやくざにいつてるようだった。でも、なんでいきなり敬語になるのかはわからなかった。声からしてあきらかに芦田

よりも年下におもえたからだ。

あー、それはあぶないで。

ヤサイやったら買うたほうがええよ。

大阪でも5千で買えるから。

あとは大麻談義だ。芦田は妙にへりくだった態度で話をつづけた。おれは内容も小せえやつだなとおもうだけだった。やがて夜になってひとりの少年が眠れないと喚きだした。やって来た警官に眠剤をだすようにいった。そのとき、だれかが「うるせえ」と呟いた。少年は怒って、

いま、いうたんだれや！

おい、侮辱罪やぞ、捕まえろ！

捕まえろ！

そうほざき始めた。この糞ガキにおれは怒鳴りたくなかったが、やめておいた。翌日、またも取り調べ、おなじことを繰り返す。そして翌週、送検された。おれは検察官のまえでうろたえたという口ぶりで、じぶんはパニック障害だといった。かれは笑みを^{たた}え、「それじゃあ、いちど精神鑑定に送ろう」といった。警察署に帰ると、刑事たちに訊かれた。

入院するなら、どこがええ？

垂水病院か、光風病院です。

監房の廊下を歩く。芦田が不安そうにこちらを見る。

どやった？

精神鑑定に持ち込んだよ。

数日後、車に乗せられて谷上にいった。光風病院だ。建物のまえに立っている男がおれに話しかける。

ぼくのこと憶えてる？

傷害事件のときに留置場配置だった中島という男だった。いまは昇進して刑事らしい。われわれは病院の裏口から小さな室に入った。ひとりの女医とひとりの看護婦がいた。おれは早口で捲し立てた。しかし、女医は「まずはアルコールをやるべきですね」とだけいった。帰りの車で中島氏は、

まえに葺合にいたときは大人しかったのに、きょうはよう喋ったな。——といった。

むかし、大衆劇団にいたので。

そやったんか。

それからまた丹波にもどった。芦田が警官に泣きついていていた。——「ここであらおれ、殺されるかも知れん。どうしたらええんやろ」と。どうやら組織による制裁が待っているらしかった。これじゃあ、200万は無理なようだ。房にもどると、西脇の男はいなくなっていた。やつについては少し腹の立つことがあった。やつに支那人だとおもわれたことだ。日本人だというと、「国籍は日本ってこと？」などともいわれた。まあ、いまや昔だ。数日経っておれは改めて調書をとらされた。泥酔してなんどもおなじところをいたりきたりしたこと、券売機に5千を入れたが、もどって来なかったこと、気がつけば公園にいて、カップルがおれのポケットから金を盗んでいったこと、気づけばタクシーに乗っていたこと。しかし、該当する公園は存在しないと告げられた。

垂水病院に入院するなら釈放する。

わかりました。

長い道中、刑事たちの説教を聞きながら過ごした。老刑事がいった。——「病院をであら、おれに電話くれ」と。やがて

病院に着く。医者は高慢な野郎で、おれの話のことごとく妄想だと決めつけた。親父が呼ばれた。直接会うことはなかった。カルテに書かれた病名は、〈自閉症スペクトラム〉だった。以前にもこの病院には入院歴があった。錯乱して送り込まれたんだ。馴染みの看護人がおれに近づく。おれは医者の発言を心外だと訴えた。病人の顔ぶれに変わりはない。まるで一生、そこで暮らすかのように存在していた。おれはたった4日でそこをでた。退院するとき、ひとりの男が冷たい眼差しでいった。――「2度と来るなよ」。

退院してから区役所にいった。生活保護の再開の手続きだ。けれども1週間はかかるという。三枝という冷血女がいった。もう金がなかったし、喰いものもない。おれは刑事に電話した。取りつく島もない。あれからどうやって生活を立て直したのかをいまはもう懐いだせない。芦田はけっきょく連絡を超越さなかったし、やつの生死もわからない。それでも、おれはなんとか生きている。そして書いている。あまりにも多すぎる、罪や咎。狂いだした時計が真夜中に蒸発するまで、おれはただただ眠って過ごした。気づくと、扉が開いている。そのむこうには砂漠があつて、吹き荒れる風がとめどなく、おれの心から焰を奪い去ってしまう。こんな感情に気づくまえに逃げだすべきだったんだ。なにしろ、この光景には出口がない。逆噴射する機体、取り残された翼が3回転半を跳ぶ。だれもいなかったはずの迷宮で、発見された事件には『ベイシティ・ブルース』というなまえだけがそっくり剥奪されていたんだもの。できるだけ速く、おれは歩く。歩道橋に立って、砂丘を走るタクシーにむかつて叫んでいた。

*

*

のらりくらりと中指を突き立てながら、その男はおれの標的となるべく、ポーカーテーブルの端っこから、こっちにむかって右手のナイフをふりあげた。けれども生憎のところ、おれのほうが早く、やつの右手を蹴りあげて、やつが壁に背中を預けた一瞬、腹にフックを見舞った。はあはあと喘ぎながら、床にくずれて落ちる男。膝を折ってそのまま世界の淵へと落ちてゆく音を聴く。でも、こっちだって気が気じゃない。慌てて奪ったやつのナイフの刃を畳んでポケットに入れ、いまいちどやつを蹴りあげた。やってらんねえ。おれは室をでると、地階へ降り、軽四に乗って職場までもどった。このしばらく、中古車ディーラーでおれは働いてる。上司の久遠はいけ好かないやろうだったけど、気前だけはこの時代にあって素晴らしなものだった。このくそ田舎はディーラーでいっぱいだ。

「女は見つかったか？」

久遠がいった。鏡を見ながら、こっちのことは見ないでいった。もともとはかれの情婦を探しにでかけたということに気がついた。じぶんがいったいなにをしてたかなんぞ、大して憶えちゃない。

「いいえ。——いかさま博奕のやろうがひとりでした」

「つまり多島には逃げられたのか」

「そうみたいです」

そうみたいですか——とかれは口のなかでしばらく繰り返した。かれなりの皮肉みたいだったが、ほんとうのところはわからない。やがて上司は立ちあがり、じぶんの鞆を持つと、店のまえにでて、ボルボの扉をあけた。そしておれを嘗めまわすみたいに見やってから、財布をだして中身を確認める。

「おい、今月の払いだ」

25万あった。

「もしも、多島か、女を捕まえたら、もう10万ばかり追加しよう」

そういつてかれは車に乗り込み、広告募集の看板のならぶ道へ下っていった。おれは夕方まで店にいるつもりでなかに入り、机のうえの計算書やなんかを片づけ、それから情報屋に手を回した。そのとき、ドアのそとでなにかの姿が見えた。少なくとも生きてるものの姿が。おれは立ちあがって、ドアに近づいた。呼び鈴が鳴った。眼鏡をかけた男が愛想笑いをしながら、呼び鈴を押してる。おれはドアをあけて、やつに挨拶をした。

「こんにちは！」

「ご用件は？」

「そう冷たいものいいはよろしくありませんよ。いまだすね、聖書について語ってるところなんです」

「すみませんが、どこかよそでやって頂けませんか？」

「いえいえいえいえ、ご遠慮はいりませんよ」

「遠慮してるわけじゃないですよ」

「ではなにか誤解されてるようで」

「誤解？」

眼鏡は清潔なシャツを着て、艶のある外套を着てる。そして、それを決して汚しまいとした顔をしてる。なんども予行演習をやったという身ぶりで手提げのなかから、本を取りだして、それを差しだした。聖書だ。

「みなさんはわれわれを怖れておられる。偉大なる神の使いとしてか、あるいは不審な闖入者として」

「で、なにが用件なんですか？」

「用件はありません。ただあなたに尋ねたいことがあります」

「なんです？」

「あなたは聖書を読みましたか？」

「いいえ、詩篇なら」

「おやまあ！」

眼鏡の顔が輝いた。やつの着てる外套ぐらひは輝いた。しまった！——余計なことをいってしまった。

「では創世記は？ 出エジプト記は？ ヨブ記は？」

「いいや、詩篇だけなんだ。——これでいいですか？」

「あなたは教会にいくべきですよ」

「生憎興味がないんです」

「あなたは詩篇を読んでも、興味があるってことですよね？」

「いいや、5年もまえのことです。もう忘れてしまいました」

「あなたはじぶんに嘘を吐くんですか？」

「いいや」

「いきましょう。ここからすぐに神さまの教会があるんです」

「神さまの？ それはカトリック？」

「いいえ、カトリックでもプロテスタントでもありません」

聞いたことがあった。韓国発だかのキリスト教風の新宗教だった。わるいやろうに捕まってしまった。おれはドアを閉めて鍵をかけた。眼鏡はしばらく立ってた。やがて唾を嘔いて、歩き始めた。神のご加護をやつに与え給え。十字を胸のうえで切ってから、おれは電源を切って、予定より早く、おもてのダイハツに乗った。

*

電話が鳴りつづけてる。おれは路肩に寄せて、電話を取った。タレコミ屋からだった。多島が女を連れて、ダーツバーに入ったところだといわれる。場所は遠いが、1時間で着く。連絡を怠るなといって切った。車が市街に入ったときにはもう日暮れて、雨がばらつきはじめてた。おれはコイン・パーキングに停めて、雨のなかをバーにむかって歩きだした。なにかと胸のむかつく街だった。あたりはラブ・ホテルの群れ。おれはもう何年も御無沙汰だった。生まれてこの方、恋人もない。くさった鯖の臭い。ほんとうは鮫になりたいのに。バーの入り口でタレコミと会った。

「たしかなのか」

「ええ、そりゃ」

「とりあえず、とつとけよ」

金を渡して入店した。店はひと気がない。もしかしたら、個室でいちゃついているのかも知れない。個室にちかい席に坐っ

て、注文を待った。やがて若い女が来たからビールを頼んだ。

「多島さん、きょう来てますか？」

「え？」

「多島さんという客、来てますか？」

「ああ、いま2階ですよ」

「電話してくれませんか。――澤上といいます」

「ちょっと待っててくれますか？」

女は電話をかけた。

「いま、降りて来ますよ」

ややあって多島がひとりで降りて来た。大きな体軀にものをいわせて生きてきたってな、具合の男だ。酔ってはいてもま
ちがいなく標的は逃がさないタイプの眼をしてる。切れ長な眼に睫毛が長い。

「久遠さんだろ、おれを探してんのは？」

「ええ、そして紗月さんのほうも」

「おーお、そりゃいいねえ」

「どうです？」

「まあ、室に来いよ」

力尽くにでも連れてやるといった感じだった。おれは従った。この男には逆らえない。室に入ったとたん、おれは窓際に
追いつめられた。多島がおれの襟を掴み、そのまま室じゅうの壁でおれをバウンドさせる。まるで骨が肉をやぶって上着を

突き抜けてしまうんじゃないかっておもうほどに。それでも10分も経てば、やつは大人しくなって、テーブルにおかれたス
ーツケースをあけた。なかには携帯タイプライターが入ってる。ただのタイプライターじゃない。それは動植物に寄生して、
擬態化するタイプのものだった。いまは蟹のかたちをして、全身の突起をざらざらとさせてる。多島が蟹の甲羅をひらく。
文字盤が見える。文字の記された無数のキーが凄く速さで上下してる。どうやら蟹味噌がインク代わりになってるらしい。
一瞬飛びだしたそれが多島のシャツを汚した。おれはおもわず、眼をそらした。気分がわるい。嘔きそうだ！

おれはテーブルを蹴りあげた。スーツケースごと、多島はタイプを頭に被った。声にならない悲鳴がして、やつは床のう
えをのたうちまわり、やがて痙攣して、それきり動かなくなった。おれはスーツケースごと、多島の顔を踏みつぶした。蟹
の体液と血が混じり合い、タイプのほうも、どうやらくたばったらしい。

*

多島の電話から紗月にかけて。かの女はあっさり白状した。旧ソ連下で開発された擬態化暗号タイプライターの密造機を、
たらし込んだ久遠と多島に闇ルートで捌かせ、その報酬として金と身体を提供してたって。おれにはどうでもいい話だった。
でも、紗月にはそうじゃなかった。かの女のいうとおりに、郊外の古い納屋にむかった。かの女はベッドでおれを待ってた。
スリッパ姿のかの女がひらいた二枚貝のようにからだをひくひくとさせ、おれに覗みかかる。でも、おれはその手に乗らな
かった。

「おまえのボスはだれなんだ？」

「そんな話訊いてどうするの？ わたしをゆする？」

「おまえのからだなんかおれはいらん。闇ルートの大本が欲しいだけさ」

「センセイはあなたのいうことなんか屁にもおもわない」

「センセイ？」

「あの方はもう日本支部を片づけたところなの」

かの女は笑い声をあげて、ベッドから降りた。

「あなたにはこれをあげる」

かの女は革製の鞆をおれに差し出した。金属的な感触がした。

「あなたはこれで小説を書くのよ」

「そんなまさか……」

「そんなまさかね」

かの女はでていった。おれはベッドのうえで鞆をあける。中身は赤い悪魔だった。赤い悪魔のタイプライターだった。おれが気おくれしていると、悪魔は喋り始めた。おれは悪魔の口に手を突っ込んで小説を書き始めた。

「おまえはばかな男だな。おれの私娼、紗月と愉しくやってればこんなことにはならなかったんだぜ」

「どういうことだ？」

「質問なら、こっちでさせてもらおう」

「え？」

「おれで小説を書く気分はどうだ？」

「わからん。なんだか気分がひどくない」

「そうだろう？」

「ああ、なんでも書けそうな気がしてる――」

「それでこの納屋はどうだ？」

「燃えてる、たしかに燃えてる」

「おまえはどうなるんだ？」

「地獄に落ちるのか、燃え落ちるのか」

「両方だよ」

「え？」

気づくと、おれは灰になってた。警察が検分してる。野次馬たちがロープのむこうで、でしゃばってる。たぶん、もう宗教勧誘を受けることもないだろう。「もろみの塔」のババアや、「天理教」のかわいい女の子たちも来やしない。おれは悪魔のなかに吸い込まれ、永遠ともおもわれる煉獄のなかで、このタイプライターをうち鳴らしながら、死につづけることだろう。そういえばなんだか、ステーキが喰いたい。おれは立ちあがって、火災現場を抜けると、車の亡霊に乗って、ステーキ・ハウスまでドライブした。道のむこうで紗月が手をふってる。なかなか、かわいい女だった。もしも、まだ生きてるなら、かの女を抱いてるこったろう。街は、道の断崖から逆さになって拡がってて、道路拡張工事の報せだけが延々とつづく。その最中にレストランの灯りやなんかが幽かな霧のなかで泳ぐみたいに見えるんだよ。

*

*

じぶんの人生の私家版をとつくのむかしに書きあげてしまった。育成歴、学歴、職歴、犯罪歴、なんでもござれだった。でも、その本はまったく売れなくて、今度の文学イベントにもわずか2冊だけ、タダで配るつもりだった。原価がかかり過ぎた。うぬぼれが過ぎた。わたしはずっと惨めな暮らしをしてきて、これからもそれをつづけることになるのは確かだった。あらゆる鉤に吊され、やがては細切れにされて売られる。そんな喜悲劇を望んではないのに。見放された作家志望の男として、36歳の凡夫として、やがては売れ残って、1片残らず、廃棄される、そんな人生の主になるとはおもっても見なかった。だれかが詩で書いたように《おれは注意深く髭を剃る／かつては才能を磨けといわれていた男》のひとりなのだ。

人生は回転を速める。以前よりは幾分マシになったようなことだ。歳をとることに怖れを抱くこともないし、じぶんが生涯を鰥夫で送るだろうことにも、だれにも愛されないということにも、なんとなく馴染んでしまった。そしてかつて憬れたすべてのものが、どうしようもない愚作に見える。まあ、歳をとって善くなるのは蒸留酒でたくさんだ。最近じゃあ、すっかりウイスキーを呑まなくなった。ほとんどはウォッカ、そしてテキーラだ。競馬はやめた。わたしには向かない。夜びって海まで歩くななんてこともやめた。眠れない夜は薬で解決できるからだ。悲しみを叙情詩で癒やそうとするのもやめた。悲しみ、そのものを感知できなくなったからだ。多くのひとびとが、わたしの領域から立ち退いていった。わたしもだれかの領域に立ち入るのをやめた。知らないふりを決め込んだ。たとえばわたしのそばに溺れる男がいたとしても、わたしな

ら平気でいられるだろう。母がわたしを見棄てたように、わたしは父を見棄てたつもりになっている。ばかな、あの男なら好き勝手に生きていられるだろう。なんたって、わたしの父なのだ。流れる血の半分はかれのものだ。そして母方の祖父がわたしに言い含めたように嫌悪するべき血なのだ。いったい、なんのために言葉を憶えてしまったのかはわからない。わたしは時折、絵描きだったころの、幼いじぶんをおもう。そのまま、絵だけを描いていれば、数々のまちがいも済んだであろうに。

10代、20代と、居場所に飢えていた。30代は気楽にやりたいものだ。それでも、このパロールがあるかぎり、わたしはそれに苦しめられるだろうし、またはどこかでひとを苛んでいるかも知れず、その内部に隠された往復運動のなかでわたしは老い、死んでいくのだ。最期の、最期まで手を繋いでくれる、やさしい人間も得られずに。気がつくと、日曜日の朝になっていて、わたしはそとへでた。たかが図書館へいくしか道はなかった。ひとびとはマスクで顔を匿い、新型の地下鉄車輛へ乗る。わたしも乗る。このまま、この土地から逃げ去ってしまいたい。いちど北陸の田舎まで出掛けたことがある。集団生活をする、若者たちに混じってわたしも暮らそうとしたが、他者との距離があまりに近すぎて、厭になってしまった。わたしはこの土地で、見ず知らずの他人のままで生きることを書ぶしかない。ものごとはみな過古になり、ひと言葉もその響きだけが残る。いままでどれだけ、人生を蔑ろにしてきたかを他者たちの顔が考えさせる。

*

図書館と商業施設のあいだの狭い道で、車がエンコしていた。やがて警官たちがやって来て、運転手の男に尋問する。男は見るかぎり、ハンドルにうつぶせになって、なにやら口を動かしている。人だかりができて、わたしはそこを立ち去ろうと

した。大きな悲鳴がした。男の悲鳴が。わたしはなにも見なかった、聴かなかったふりをして、施設のなかに入り、そのまま通り抜けて、歩道に立った。パチンコ屋の電飾がむなく、光っている。わたしは6年まえ、あそこの入り口で男を撲った。かれに非はなかった。ただわたしは酔ってもいたし、失恋を漂っていた。むろん、そんなこととは関係なく、そのまま逮捕されて、執行猶予が3年と6ヶ月ついたというわけだ。いまではかれのための損害賠償を月に2千ずつ払っているというわけだ。わたしは北六甲台小学校、'97年度の卒業生で、ふたりめの犯罪者だ。もうひとりとは電車のなかで集団痴漢を女子高生にカマしたスケベやろうだ。あいつはおれよりもずっと運がない。実名報道された挙げ句、実家棲まいであるのがバレてしまい、同級生たちのなかでしばらくの話題だった。いまではかれらかの女らにわたしは完全に見限られてしまっている。どうだっていいことだ。遅かれ、早かれ、わたしの運とはそんなものだ。ほんとうの友人などいない。女たちの声がする。

「それで、そのまま置いて来ちゃったの！」

「えーッ、それで、どうにもなんないの？」

「え、だって、だれも見てなかったし、いちおうそんなときはまだ生きてたんだから」

「最悪う。——だってもし、それがあなたのだってわかったら、——」

「いまごろ、ひとりぼっちでいるのかな？」

「たぶん、あなたのなかに還って来るって。あしたが来たときにはまるでなにもなかったかのように来て、あなたが目醒めるのを待ってくれるはず、だから、きょうは卵を温めて過ごそうよ」

「そうだよ、いまごろステレオでも内蔵した制服警官たちが指令を待って充電ポットに入ってるだろうし、あなたのいう回帰が、神からなのか、資本からなのかがわかる頃合いには、ひとのひとりも死んじゃって、でも、だれも手を合わしたりしないなんてこともあるはずだって！」

女たちは去っていった。わたしは信号を渡り、パチンコ屋の店頭テレビのニュースを見た。どっかの遠い街で、若い男が父を殺して逃走中らしかった。凶器は酒壺だった。わたしは帰りにCCをいっぱい買った。わざわざ東門街の酒屋にいった。もちろん無料のライムもふたつ貰った。地下鉄で新神戸までいき、生田町の安アパートに帰る。冷蔵庫をあけてウィルキンソンのジンジャーエールと氷をだし、グラスに注いだ酒をわった。そこにライム果汁とビールをくわえ、軽くステアしてから一氣に呑んだ。いい気分だった。男たちの声がする。

「それでおれはかの女が帰るのを待って、ロビーに立ってたんだ」

「何時になって女は帰ったんだ？」

「午前4時半だった」

「それまでおまえは立ってたのか？」

「いいや、何度か階段に腰掛けてさ」

「別れをどうやって？」

「いやあ、べつに、《おれたち終わらだね》って。それだけ」

「なるほどな、かの女はきみの愛情を喰い尽くそうとしてたんだ」

「さあな、おまえのほうはどうなんだ？ うまくいってるのか？」

「いいや、こっちもよろしくない」

「だろうな、女つてのはフルタイムの仕事だからな」

「そうだ、それにタイムカードもないと来る」

「おれはおもいだすよ、夏の海辺でかの女を誘ったことを。まだかの女はモノラルだったし、ちっぽけな真空管がふたつ

あるだけのプリアンプだった。おれの母親はメダカだったし、父親は裸だった、祖父は鶏冠で、祖母は烏賊、兄は放浪癖のある立派なシラカバだった。もう間に合わないのはわかってる、でもおれにほんとうに必要なのは、分割された礼子の黄金幻想だったんだな」

「なあ、気を落とすなよ。おまえのなかで眠る旋律、いまにもふるえそうな戦慄、とどかないところで泣く殲滅、いまやがて来る前立腺、腺、腺。そして戦場、そして洗浄。溶解するおまえの顔、潰瘍できるおまえの胃腸、きつと手術台、たぶん二度とない、まったく意味のない空前の恋、もっと濃いなにかがおまえを責める、でもそれだけで終わらない。週末ずつとステーキ屋で、繰り返されるおまえのディナー、血の滴るような牛肉のなか、おまえの出したスperlマがいま、芽吹いてる。だってそう、そこがおまえの世界、だってそう、そこがおまえの意識、おまえのなかで沈んでしまえ。おれならおまえを救ってやれる、おれならおまえを救ってやれる、おれならおまえを救ってやれる。繰り返される、おなじような文学！」

「ところで、そろそろ金、返してくれない？」

「え？」

「返せよ、いま」

男たちは去っていった。まあ、間に合わせでもいいから快樂ってものが欲しいものだ。わたしにはもうずっとそれが無い。瘦せた現実を、空想で補うことはできない。両者のあいだに主従関係を敷くわけにもいかないし、いまさら、他者を求めようにも、学も職も貯金もない30男を相手にするような女なんかいやしい。それにけつきよく、ひとりでいることにもはや馴れきってしまった。いまさらだれかとの距離をちぢめたところで、愛情よりも憎悪を膨らましかねない。いつときのお遊びならいいが、それ以上は面倒すぎる。人間ぎらいのエセ・インテリに成り下がってしまったようだ。少しは愛と希望を持ちたいものだが、この街が没落していくみたいになわたしの人生もまた墜ちてしまうような気がする。おれは電話をとつ

て詩人に電話をかけた。詩人の声がする。

「もしもし、ナカタですが――」

「わるいけど、いま忙しいんだよ！」

詩人も去っていった。独りよがりの夜だけがラフレシアのように咲き乱れる。どうしようもない。酒を友にして、わたしは諧謔曲スケルツォを踊った。キーボードのうえで。もちろん、980円で買ったキーボードは見事に壊れてしまったが。わたしのなかにはどれだけ使ってもいいくらいに言葉が詰まっていた。ただし、どこを切ってもそこにはなんの感情もなく、愛もなく、ただただ人間らしい営みを喪失したものの、むなしさばかりがあふれていて、とてもじゃないけど、ひとさまに見せられるものではなかった。未明まで踊ったあと、隣からの苦情を受け、すべての音楽と、すべての言葉、そしてすべての電化製品の電源を落として、次の13時48分まで眠ることにしたというわけだ。

*

*

春の昼下がりのことだ。通学路で突然にいわれたんだ、あのくそ学校のやつらから。理由なんかわからない。たぶん、おれそのものが珍しかったんだろう。いつもおれは標的になった。

おまえ、キツシヨいねん。

なんでおまえみたいのがおるねん？

はよう、死んだらどないや？

殺してもらうとこ、教えたるか？

幼稚園で一緒だった、佐々木たちがいう。おれはやつらにペン軸をむけた。いつも漫画用に持ってたカブラペンだ。

あぶないやろ。

ええがかげんせえんと痛いめに遭うで。

おお、遭わせろよ。——いますぐにな！

なんでおれたちに逆らうねん？

おれにおまえらが逆らうから。

おまえ、親いんのか？

さあな、憶えないな。

いますぐに死ねや。

裁判にかけろよ。

おれはいった。そういつておれはじぶんを守った。そんな日が長くつづいた。だけど、ペーパー・ナイフ、それがおれの冒険だった。おれの中学校は評判がすこぶるひどい悪所で、くそだめそのものだった。はじめは悪口をいわれ、ぶ厚い唇を侮辱されただけだったが、やがて上級生に撲られ、不条理を学ぶ教科書さながらの体になり変わった。たしかにおれは善良ではない、けれど、ただの変わりものだったはずだ。いったい、あの学校をだれが悪の臥所に変えたのかはわからなかったし、いまでもわからない。数名のかわい子ちゃんを除いて、学校はひでえ檻だった。逃げられない場所だった。だってどこにもいっても家父長主義の十字砲火がおれを追撃したからだ。父は権力にものをいわせて、おれの存在を脅かした。成績表を見るたびに奴さんは激しく怒った。そして深夜過ぎまで説教が待ってた。不合理が家でも学校でもつづき、それによって舗装された運命がおれのまえにずっとずっとつづいてた。

夏休みを迎えるまえの7月14日、担任の国語教師がおれに声をかけた。狐のような顔をした、過干渉な年増女で、おれはなにかとかの女によって、恥ずかしい眼に遭ってた。

夏休み、みんなで旅行にいくんやけど、どない？

はあ、——考えておきます。

その話を聞いた母はおれの諒解もとらずにサインしてしまった。まったく、ろくでもない親を持ったものである。当日、集合したのは札付きのヤンキー少々、根暗、いじめられっ子諸氏だった。国語教師から見れば、じぶんだってその仲間ということになる。なんとも苦々しい気分になった。貸切のバスでどっかの海岸へいった。狭くてボロい民宿に入れられ、テレ

ビのない室でおれは絵を描こうと藻掻いたものだ。やがて夕方になり、食事が終わり、その狭い室で、おれはほかの連中とは離れて、ちがうところにいた。やつらとは一緒になりたくなかった。品のないヤンキーがきらいだった。いまだってそうだ。窓の景色には生彩がなく、茂みで澱んで見えた。

おい、こっちに来えへんのかい？

え？

おまえにいつてるんや、おまえハミゴか？

ハミゴ？

そう、ハミゴやんか、おまえ。

未開人の辞はわからない。嘲笑が聞える。暗がりのなかで嗤う、面炮だらけの醜い顔が見える。そのとき、おれは立ちあがってやつらのところにいくしかなかった。いまだったらハミゴでもなんでもいいのだけど。だれが好き好んで卑しい連中と一緒になくてはならないのか。女子はみな1階で、男が2階だった。ただその女子たちにしたって醜女ぞろいだ。そして教師たちはもっとランクの高い宿に泊まってテレビや酒に興じてるらしい。なんという欺瞞なんだ。おれは嘔き気がした。胸くそがわるくなる。それでも蒲団を並べた。男同士で寝るなんて金輪際勘弁してくれ。

翌朝、海へでかけた。おれは水色の腕時計をした。片山というちびの双子のひとりがそれを見つけて「貸せ」といった。品のない、苦しみを知らない口で。本心いやだったけど貸した。おれは泳ぐ。はなれ小島にむかって遠泳した。途中で溺れそうになったものの、だれも助けなかった。悲鳴する。小島の男たちがおれを眺める。なんとか島に着いた。男たちがいった、「おれたちに近づくな」と。岩場を1周すると、やる事がなくなった。またしてもあの距離を？ けっきょくは泳ぐしかない。おれはもとの海岸までもどった。水からあがって岩場を歩くと、おれの時計が毀されてた。おれは柔道教師に告げ

口して、解決させた。あとはずっと旅が終わるのを待った。

帰りのバスが、サービスエリアで停まった。土産物屋まえでだ。おれは財布を忘れてしまい、なにも買えない。それでも店に入ろうとした。事情を知ってる、片山のどちらかがおれにいう、――「金ないやつは店に入るな」と。おれは無視して入った。見るべきものはなにもなかった。帰ったら金を本に遣おうとおもい、バスに乗り込む。やつらの嬌声がおれの脳髓を刺激した。もちろんのこと、わるい意味に於いてである。

*

夏の課外旅行をきっかけにおれは河内という痘痕^{あばた}づらやら、片山にしつこく狙われるようになった。べつにおれがなにか仕掛けたわけじゃないが、なにか隙があるたびにおれはやつらのおもちゃにされた。河内はしつこかった。運動会でもわざわざ列をはなれておれに蹴りを入れた。片山ひとりには図書室でもろに撲られもした。まるで力石に初の一撃を喰らったジヨーのような気分だった。そしてやつらのボスだった山田創には便所に連れ込まれて2発も喰らった。おれはただ歩いて、足がやつにぶつただけだし、もちろん謝った。それでもやつらの安っぽい自尊心はだれかを攻撃せずにはいられないんだ。おれは屈辱で教室で泣いてしまった。おなじ小学校だった榎田太郎や福田亜希が、無表情で眺めてた。くそつたれめが。ひとの痛みのわからないやつはどこにでもいるんだ。それでもおれは黙ってやつらの餌食になった。それしか生きる道がないからだ。

でも、おれの傷はたやすくは癒えなかった。父も母も学校という場所を盲信するだけの阿呆で、そいつを崇拜するだけの能力だけしかない。学校なんざケツでも喰らえだ。おれはやつらがきらいだ。苦しみを与えるだけの存在に奉仕することは

できない。くそつたれだ、すべての同級生ども。おれを救わなかった教師たちもけつ喰らえだ。秋のあいだずっと、おれはたったひとりの復讐をおもって、爆弾づくりを夢想してた。花火の火薬をつかうとか、黒色火薬を自作するとか、ナイフを買うだとか、そんなおもいだけがおれを生に駆り立ててた。どうしてひとはひとを殺すのだろう。毒ワイン事件や、金属バット事件のルポタージュを読みながら、なぜひとりのひとが孤立して殺人事件に散ってしまうのかを考えた。なぜこの人生は生きづらいのか、なぜおれには友人がひとりもないのかをずっと考えた。

しばらくして地域清掃をやらされたとき、おれは友人とはいいいがたい堂ノ元と一緒にされた。屈辱だった。上村も吉村も友人同士と一緒にだった。やつらは唾った。だのにおれはおれのようにまぬけな堂ノ元とともに長くて、勾配のきつい坂をいったり来たりさせられたんだ。こんなことってないよな、けどあったんだ。そして松本とていういいじめつこが、「おれんちにゲームがある」といいだした。もちろん、おれだけが誘われなかった。死にやがれ、名塩クリーンハイツの大馬鹿者め。その冬、おれは山田たちに包囲されてしまった。この発端はじぶんでもよくわからない。おれはやつらの下駄箱を探り、靴を切り裂いたり、とにかく陰湿なことをやってた。それからしばらくして山田がおれにいった。

いろいろ、すまんかったな。

え？——ああ、おれもわるかったよ。

それから数日して、クラスメイトの谷がおれを呼びつけた。ちょうど教室の掃除をしてるところだった。

山田たちがおまえを呼んでる、いったほうがええ。

やつらがどうだっていうんだよ？

とにかく呼んでこいいわれたんや。

おまえが来えへんかったらおれが撲られる！

ちびの谷はしつこかった。おれは無視した。終いにはやつも焦っておれの悪口を叫び、どうにかおれを廊下にだそうと必死になってしまった。

ミツホのアホ！

バカ！

教室からでろ！

あまりにも憐れだったから廊下にでた。山田に河内、片山がいた。オカマ野郎が勢揃い。教室のみんながおれを観察した。「謝れよ」と山田がいった。

なにを謝る？

なんでもええんや。

おお、土下座してやるよ。

なんでもええから謝れや。

おまえ、おれを莫迦にしてるやろ。

まったく未開人の思考は理解できない。それに観衆も気に喰わない、いつもはきれいごとを嘔いてるやからだって、なにもいかなかった。生徒会立候補？ クラス委員？ まったくおたわごとでしかない。まるでなにも起こってはないみたいだ。おれはただただ悪党のまえに立たされ、怯えてた。長い時間がたったギャラリ―どもは平然としてた。あの、かわいいとおもった和内真帆ですらも。そして捕食される小動物を見るようにおれを見る。ふだんはちゃんい福田亜希だけが、「先生を呼んで！」と声をあげる。それがおれには耐えがたかった。やがて暗くなる、終業後の教室。おれは「謝らない」といった。

「土下座もしない」といった。やがて担任が来て、山田は悔しそうにおれの足を蹴った。なにもかもが終わって、一切助け

なかった上村におれはいった。

やつらに復讐したい。

屈辱ではち切れそうだ。やつは顔色も変えず、ペーパー・ナイフを差しだした。――「これ、つかえ」って。おれはナイフを持った。やがて終礼だ。おれは、おれをやつらの眼前にだした、谷を狙って、その足を刺した。まるで感触がない、2度刺した。確かな痛みをやつは声にださなかった。ただ「痛い」とだけいった。おれは山田も刺すつもりだったけど、動揺してしまい、そのまま教師につれていかれてしまった。隣室じゃあ、血まみれになった谷が苦痛に呻いてた。担任の女教師である三宅は無表情だった。体育教師は、「こんなやつがやったのか」と意外そうに漏らした。だれだって怒ればなにをするのがわかってないんだ。おれは隔離室にやられ、尋問が始まった。やがて母親が来た。「わたしのせいで」と泣きだした。母はまるで関係がない。むしろ父のほうに関係があったのに。それでも時間が経てば、みんなが冷静だった。母も教師も同級生もがだ。

みじかい説教のあと、家に帰された。父に報告した。やつは平然としてた。「刺した」のをなんともおもってない。そのまま眠り、おれには一瞥もない。やがて日が過ぎて、謹慎が終わった。同級生たちはおれを嗤った。そしてほかのぼかどもや、知恵遅れみたいにおれを接した。なにかもが漫画みたいに過ぎ去り、徹でさえなにもいわなくなったころ、やつは「ナイフのことはいわいでくれ」といい棄てて体育館へと去っていった。やつは友達なんかじゃなかった。ただの通りすがりの幼なじみだ。そして上級校を目指しておれの姉や、吹奏楽部の寺尾麗奈や、吉村大介たちと一緒にいるみ、おれを嘲笑い、そして山田だけが怨めしく細い眼をあけて、おれを鞆で叩いた。やつはなにもいわない。おれもなにもいわない。なにかいいなかったが、できない。そのときを境にして、だれもおれに攻撃することもなくなった。水島や今野とかいうヤンキーどもも去っていった。

おれは気に喰わなかった。もっと口実が欲しかった。ひとを傷つけるための口実が欲しくてならなかった。でも、もはやなかった。なにもかも終わったころだった。おれと谷は一緒にいた。おれはカッターの刃をがちがちいわせながらやつを怯えさせてた。

もう刺すなよ。

もうやめてくれよ。

おお、そうだな。

忘れるなよ。

もちろんだよ。

じゃあな。

ああ、じゃあな。

弱々しい声でいった。それからやつは転校した。そのときわかったんだけど、谷は孤児院の子で、むこうの計らいでいなくなつたということだ。やつの友人だった長岡はしばらくおれを罵った。授業のあいまに大声をだすんだ。こちらも見ずに。それがおれにはつらかった。だれも反応しない。

ミツホ、キツシヨー！

ミツホ、死ねや！

やつの声がいまだに内奥を飜してる。おれにいえることは山口中学校はばかの砦だつてことだ。もうずっとまえだった、幾年もしてから、おれはやつらに最初の詩集を送った。それはそのまま帰って来た。一筆もなく。電話をしたら、ずいぶんと慇懃な具合でいわれた、教師のなかに不賛成なやつがいたから返したと。礼を欠いた口で。非礼そのものの口ぶりだ。

ひとの痛みがわからない口で。おれは諦めて話を終えた。もし、おれのようなやつがいて、おれの詩を読んでもくれたらともってた。それは叶わなかった。おれは涙に濡れた袖を払い、三宮の街をただただ徘徊したつけ。これがペーパー・ナイフの冒険ってやつだ。上村はいまもどっかで平気で暮らしてるし、あのナイフはもはや存在しないだろう。ただただ谷には申し訳ない。おれ以外のやつはだれも咎を憶えることなんかないんだよ。

*

*

ひどく退屈だ、年の瀬ってやつは。ひとがいない。通りにも、このネット上にも。文藝サイトはいつも閑古鳥が啼いている、そしてそれもやがて聞えなくなった。あるのは死。夢絶のなかの静かな死だけだ。おれはサイドボードから零れ落ちた手紙を拾う。そしてあける。世田谷のご婦人がおれを称賛していた。だが、おれの心は固く閉じられていて開かない。門が錆びついていて、ないにも感じない。乞食になる覚悟もおれにはなかった。ブログの読者は増えたのにだれも読まないという事実。野積みにされた事実のなかで、最良のものを撰びだしたいという願い、そしてその願いを掻き消す、寂寞とした男の内奥。おれはずっとひとりでいる。すると脳が渴いたような感触がしておもわず、頭を掻き塗りたくなる。ひとりでいるのが長いと、じぶんを認識する能力が薄れてしまう。じぶんの輪郭がわからなくなる。きのう読んだ本、『ケーキの切れない非行少年たち』にもそんなことが書かれてあった。だが、ひとのなかに入っていくのはたやすくはない。作業所ではもはや目的を見喪ってしまった。動画の編集も、キャラクターデザインも、ブログも半端なままで終わってしまった。正直いって生彩を喪ってしまったんだ。

でも、だからといって室でできることもない。ギターの練習は止まっている。どうにも身体的不器用さがおれの邪魔をしているみたいなんだ。ストロークもでたらめ。リズムもだめ。せっかくの愉しみも、この発達障碍という軀のせいでオジャンになったという感じがしている。来週のレッスンをどう乗り切るのがわからない。まあ、正直にじぶんのレベルの低さを

申告するほかはあるまい。

だれもない室で、だれかをおもう。おれには恋が必要だった。だが出逢いのない以上、じぶんを模写しつづけるしかないようで、またしてもおれはすでに概念と化してしまった初恋にすがりついたりする。かの女のなまえで脳が埋まる。酒が切れて3日、とにかく落ち着かない。デンキブランを一本、ロックでやりたかった。あの松脂のような香りを嗅ぎたかった。他人のブログを読む。読者からプレゼントをもらって意気揚々だった。羨ましい。おれにはそんな読者はいないからだ。さむぎむしい室のなかで、じぶんの過去とともに踊る。なんていうことだ。こんなにもおれはひとりなんだ。

通り静かなままで、おれの室に砂漠が侵入して来た。たった1時間で室は占領された。不法移民たちがバスに乗って押し寄せて来る。なかには赤子を抱えたものや、瑕を負ったものもある。おれはなし崩しに受け入れ、11帖の室は充たされた。知らない言語のなかで、おれは和文タイプライターを見つめる。砂のなかに両手を入れて、ものを書き綴った。できあがった原稿を抜きだしたとき、それはまさに砂そのものだった。黒めがねの男がおれの肩を小突く。

「きみはいい作家になれるよ」

「ああ、おれはいい作家になるんだ」

かれは砂丘を登っていく。おれは暮れる砂漠で、ばらばらに眠るひとたちを一瞥し、じぶんもひとりで眠った。大勢のなかで、たったひとりで眠ったんだ。そして目覚めたとき、砂漠は消え、黒めがねだけが残される。おれはおもわず、自身の心音を確かめた。そんな光景が確かにきのう、モニターに映写されたんだ。だというのにおれは幸福になれない。死んでしまった友人のために3つの詩を書き、詩集をかの女に捧げることにした。

「文句があるなら、表でやれ！」

老人がいった。おれはかれのなかにいた。

「ここは男子禁制よ！」

妊婦のなかでおれは道に迷っていた。

「警官を呼ぶぞ！」

金満政治家の家でおれは本を読んでいた。なぜ、これほどまでにまちがいがながら、なおもおれはひとりなのかがわからなかった。もうすでに手遅れなのか。観念ばかりが噴射され、実感の隠ったものが書けなくなってきた。馬はいい。人間よりも美しい。ダートレースは土曜日の午後。4番の馬が3ハロンで追い抜いた。おれは額に指をやって、テレビを消した。テレビごと消した。なにしろ、鉛はなまえがないほうが都合がよいからな。そうやって感電したクラゲが鯨を夢見るのは騎士道精神に恥じる。だから乳母車で共産主義者どもを轢き殺さねばならない。資本主義と金慾に塗装された車で、穢らわしいダンスをする若者たちと、手を組むためにはこうならなくちゃいけない。おれはスタジオで、おれの来歴をあらかた喋り終えると、あなたにむかつて手をふった。

「わたしはあなたが好きだ。冷蔵庫のように愛してる。イカサマに厭きてしまったので、もううそはつけない。わたしはあなたと***するために生まれたんだぜ？——さあ、勇気をだして、わたしにお金を送るのです。アルコールを送るのです。それがあなたの徳となるでしょう」

ディレクターがいった。黒めがねをかけて。

「ああ、ダメダメ。いまの一切カット！」

そしておれに近づく。

「でも、きみはいい作家になれるよ」

「ああ、おれはいい作家になるんだ」

かれは砂丘を登っていく。おれは暮れる砂漠で、ばらばらに眠るひとたちを一瞥し、じぶんもひとりで眠った。大勢のなかで、たったひとりで眠ったんだ。そして目覚めたとき、砂漠は消え、黒めがねだけが残される。おれはおもわず、自身の心音を確かめた。そんな光景が確かにきのう、モニターに映写されたんだ。だというのにおれは幸福になれない。死んでしまった友人のために3つの詩を書き、詩集をかの女に捧げることにした。なにかがまちがっているような気がする。でも、おれは気にしないことにした。酒が欲しい、酒が欲しい、酒が欲しい、酒が欲しい、でも、酒よりもホントは愛が欲しいんだよ。

*

ボールのゆくえ

*

猟銃の発射音が聞えた。北野の高台のほうからだった。たしかに聞えたはずなのに、だれも110番に電話をしないようだった。とはいえ、おれもしなかった。猪でも撃ったのかも知れない。時間は10時半、すっかり明るくなった陽差しのなかで、おれは窓をあけ、そこを確かめる。歩いてる人間はない。生きてる人間もない。この世が地獄や煉獄と地つづきだってことをおれも知らされる。どうしておれがこの場所に存在して、別の場所にはないのかどうかってことを考えてみる。たわいもない戯れごとだ。やることがない。とりあえず、インディー雑誌をだしてる某氏にメールを送った。出版物、その販売ルートの確保について助言を乞うた。おれはもう数年、じぶんで自身の本をだしてるけど、いまだに販売ルートを持ち合わせてなかった。オンデマンドのリンクを貼って、だれかが注文してくるのを待ってるだけだった。なまえと作品を売るためにしなければならぬことのすべてを学ぶ必要があった。返事を待つあいだに図書館へいった。予約の本を受け取って、地下鉄で帰る。

けっきょく、その日返事はなかった。そういえば写真集専門の本屋にも自主制作の扱いについて、あらたに希望するメールを送ったものの、もはや1週間過ぎても返ってや来やしない。ばかにしてやがる。****、おまえについていつてるんだぜ。それに××××だ。サイトの問い合わせからメッセージを送ったものの、沙汰止みになっちまってやがる。鼻につくほどの俗臭がしてる。まるで他人の屁のなかで呼吸してるようなありさまだった。つまるところ、おれはだれにも相手にさ

れてない。だからこそ、ワッツがあつて、砦があるんだぜ。救いたいことはみな、バター・トーストをオーブンにかけるほど容易いものんだ。まるで神の導きがあるようにふるまったところで、じぶんの足に躓いて転ぶのが精々の恩寵でしかなく、そして見えない相手にむかつて、その腕をふるって、鉈を降ろすようなマネをしたら、今度はじぶんの足を断ち切ってしまうかねない。だいたい、おれがこの席に坐つて、時間を過ごしたところで、なんの物語も降つて来やしないのだから。おれは Joan Of Arc を聴きながら、無為の時間を過ごし、やがて暗くなるまで過古の記憶を、あらゆる登場人物たちをザッピングしてた。それからどうにか歩いて、森まで坂を登ったというわけだ。

じぶんでもよくわからない。傾斜の厳しい北野町に這入つて、おれはその深部まで踏み入れた。上流階級の墓場のような邸宅、そして不案内な隘路を越えて、繁みのなかに這入っていく。するといふんだ、その男は。ぬかるみのなか、ゴム長にベストを着、散弾銃の口先を下げて、立ってる。おれが持つ懐中電灯にはまったく動じず、そつと発てた人差し指を唇に当てて、**「音を発てるな」**と警告した。

なにもいえないまま時間が経った。男は叢を掻き分け、標的にむかつて歩き始めた。そして引き金を2度引いた。だれかが悲鳴した。よく見れば猟銃じゃなかった、空気銃だ。それでもひとを傷つけるものには変わらない。男は口をひらいた。

もう喋つてもいいぞ。

おれはじぶんの声を忘れるところだった。

こいつを見てみる。

胸を掻き毟りながら、痙攣する女が斃れてる。

いままで仕留めたものより小さい、でも狂暴だ。

若い女だった。もつといえればそれなりに好みの女だった。でも、もうじき死ぬんだ。おれは怖いとも、悲しいともなく、

そいつを眺めてた。

待ってろ、いま介錯してやる。

男はベストのポケットからナイフをとって、かの女の首を切りつけた。うまく頸動脈をやったらしい。血のしぶきが1フイートはあがった。かれはうまいこと、血を避けて、あとずさった。それから女を猫車に乗せて、運びだした。森のそとへ、着いていくとピックアップトラックが一台停まっている。アメ車だ。男は荷台に女を乗せ、ロープで固定すると、血が洩れなように毛布とウレタンを配置し、シートをかぶせた。そして葉巻を咥え、火を灯しながら語る。

ここらでずっと仕事をしてるんだ、こいつらはみな逃亡者だよ。

どっから逃げたんです？

実験室と政府、その両方だって聞いている。

どうして殺すんです？

いや、おれにもよくわからないだ。

ただ殺せばいいといわれたし、

おれも殺しを躊躇ってるほど金持ちじゃないってことだ。

この車だって、銃だって、

みんなやつらから借りたんだ。

だから、こいつらが罪のない一般人だったとしても不思議じゃない。

男は火をつけたばかりの葉巻を藪へ投げ、そして唾を嘔いた。

なんですって？

おれは驚いて問いただした。

じゃあ、あなたの殺しを正當に許可した組織の見当もつかないんですか？

それじゃあ、いま捕まって、

あなたが縛り首にされたとしても、

文句のつけようだってないってことなんですか？

男は表情のない顔で、おれの声を聞き、いった。

そういうことだ。

おれには余地がない。

おれはもうこの男に興味がなくなってしまう。帰ってしまおうと、うしろをふり返った。そのとき、男がおれの背中を叩き、おれにいった。

まあ、まあ、そう焦んなさんな。

1杯ひっかけにいこうぜ。

いいでしょう、奢りなら。

心配するな、報酬はたんまり貰ってるんだ。

おれたちはまず男の家にいった。家は岡本のH橋を渡ったところにある。そこで死体を柩に入れて、車庫に置いた。朝になれば業者が撮りに来るといふ。それからのはかれの馴染みで酒を呑み、やがてかれが引っかけた女と一緒に、おれのアパートに雪崩れ込んでしまった。こんなはずじゃあ、なかった。ふたりはおれのベッドを占領したため、おれは台所のまゝで毛布をかけて眠った。明け方になって、ふたりはおつ始めた。女が尽くす、男が褒美をやる、そのまま3回もイッて、また眠

った。

*

ふたりを追いだそうとしたときだった。男はおれに鍵を渡した。それは車と家の鍵だった。おれはそんなもの欲しくはない。——「でてけよ！」。

やだね。

どういうつもりだ？

今度はおまえさんだ、おまえさんが殺せばいい。

おれが？

どうして？

もういやになったんだよ。

これからはここで暮らす。

ここで眠る。

もう殺人とはおさらばだ、ハッハッハッ！

怒りに震えたがなにもいわなかった。おれはおもてへでた。やつの車に乗ってやつの家にいった。車庫をあける。柩はもうなかった。その代わりに空の柩があたりしく用意されていた。銃を確かめる。おれにはどうしようもない。とりあえず、腹が減ったから台所で喰いものを漁った。ちょうどいい具合の豚バラの燻製が仕上がってる。おれはそいつを喰いながら、こ

れからについて考えた。アパートに帰れない以上、おれは作家になり得ない、ここにいる以上はそのうち命令でも受けて、ひとを殺さなきゃならない。どうしたわけか、たかが森に入っただけで、進退窮まってしまうてる。そのとき、電話が鳴った。おれはなんと名乗ればいいのか。あの男のなまえも知らない。でも、でるしかない。

もしもし、きみがあたらしく就いた捕獲者かな？

そうらしいが、おれの意志じゃない。

まあ、まあ、それもけっこうなことじゃないか。

ぜんぜん、けっこうじゃないね。

おれはアパートも追われ、ここに来るしかなかったんだ。

くそ、いったいなにがどうなってんだ？

きみは現実を受け入れることだよ。

それがいやなら前任者を殺して、柩に入れることだね。

どういうことだ？

じぶんで決めることだよ。

電話は切れてしまった。おれは豚バラを喰い尽くした。それからタリスカーを呑み、やつの葉巻を吸った。コロナ・スマトラだった。煙のなかで、おれ自身を燻製にしまいかねない事態が進んでる。おれはじぶんの室に電話した。

もしもし、おれだよ。

で？

取引しねえか？

なんの？

おれはその、政府と実験室の連中と戦いたいんだ。

やれば？

あんたの協力がいるんだよ

協力ねえ……。

なんとか、おれはやつを誘いだした。そしてガレージの万力で後頭部を打撃した。1発じゃあ、死ななかった。それから5発ほどやってようやく、くたばった。あらかじめ、ビニール袋をかぶせておいたから、血のほうは大したことになるなかった。引きずって、柩に入れ、明け方まで待った。やがて車の音がして、停まった。ひとが降りて来る。黒服の男たちが柩を持ち上げる。そして車に運ぶ。おれはやつの空気銃を構え、そのなかのひとりを撃った。片方の足が血で染まった。

おれも同行する。

やつらはなにが起こったのかもわからない。眼をばちくりさせて、こっちを見てる。白いワゴンのまえで立ち尽くしてた。

やめておけ、きみは得をしない。

どうだろう？

なにが目的だ？

殺しを指揮してる張本人に会いたい。

会ってどうする？

金を頂くんだ、これまでのことを口にしないために。

おれは助手席に坐った。やつらは観念して車をだした。車は神戸を過ぎ、六麓荘にむかった。ネットの画像でしか見たこ

とのないところだ。いったい、ここでなにが待ってるというのか。おれはじぶんが大物にでもなった気分で、車窓を眺め、スマトラを吸う。ここは禁煙だと運転手がいった。おれはかまわずに吸った、吐いた、吹かした。頭が鈍くなっていく。気分がロウに入る。まるで陶酔でも憶えたように、くらくらと頭蓋をゆらす。そのとき、後部座席から物音がした。声をあげる閑もなく、首に紐が絡み、呼吸がとまる。おれは慌てて運転手を蹴りあげた。車は縁石に乗りあげ、大きく跳ねあがる。メカジキのように勢いよく飛びあがる。坂の中腹で、急ブレーキがかかり、紐がゆるくなった。紐を解いて、うしろの男を撃った。急所は外してある。

おい、眼を醒ませ。

運転手はいったんバックしたあと、車の方向を正し、坂を上り始める。なんてこった。やつらはおれを殺すつもりなんだ。まあ、そんなことは最初からわかってることだ。やがて防風林に囲まれた、U字型の建物に出会った。コーヒー・カラーの壁、丸い窓、5階建てで、屋上は庭園になってる。おれたちは降りて、屋敷にむかった。U字のちょうど底辺の部分に門がある。ひとりが呼び鈴を押す。挨拶と用件を述べる。やがて庭石を渡りながら、小さな執事らしいのが歩いて来る。

お待ちしてました。あたらしい捕獲者の方ですね？

そうらしいですが、くわしいことはなにもわかっていません。

これから主がご説明致します。

どうぞ、といわれ、歩きだした。おれのほかはだれもついてこない。不安になったが、どうでもよかった。庭石は55個あった。玄関口につく。靴はそのままでもいいと執事がいうから、おれはそのまま土足であがった。

お飲みものはいかがですか？

スコッチ・アンド・ミルクを。

銘柄はいかがなされますか？

馬でいい。

それは、それは、謙虚な方ですね。

微苦笑を浮かべてかれはおれをエレベータまで連れてった。屋上の庭園に主がいるということだ。——お先におあがりくださいといって、かれは姿を消した。おれは屋上にいき、植えられた観葉植物、ハーブ、そして桔梗の花の群れを見る。どうしたものか、花は桔梗しかなかった。いったい、どんなやろうが人間狩りを企てたのだろう。そうおもいながら、U字の上を一週した。そして小さなサボテンの鉢植えに手を触れようとした矢先だった。

待つて、そのサボテンには毒がある。

ハーブ・トレンチを着た女が、おれに声をかけた。動揺と冷酷さが混じり合ったようなおもざしでおれをずっと見てる。

あなたですか、殺戮の司令塔は？

なんていい方を。

でも、現実起きたことだ。

そうね、でもあなたもひとを殺したんでしょ？

あいつは仕方がなかった。

おれを殺しに招き入れた挙げ句、アパートまで奪いやがったからだ。

どのみち、長生きはできない質だったろうぜ、

だってあいつはじぶんが殺す意義さえも持ってなかったからな。

生活のため？——ひどいいいわけだ。

それで、あなたはなにが知りたいの？

実験室、政府、逃亡者、捕獲者並び、すべての計画、そしてあんたとの関係だ。

素直に教えるとおもって？

おもっちゃいない。条件がある。

おれは一切を口外しないことを誓い、かの女の答えを待った。長い時間があつた。おれはカウチに坐つて、吸いさしのスマトラに火をつけ、重い溜め息をついた。ひとの死について、いままで本気で考えたこともなかったような気がする。おれはやつを殺すんじゃないかった。でも、なにかも遅い、遅すぎる。

わたしたちの組織の狙いは、人工的に無垢な天使を創りだすことよ。

なんだって？

無垢な天使よ。

生まれるまえから実験室で育成し、

最高の教育を施し、

抑圧と俗臭のない環境で育てた天使たちを世界に送り込むことにある。

でも、わたしたちの政府の力ではなかなか、

それもうまくいかない。

それに天使たちもそのままではいられなくなって逃げてしまう。

秘密を知られてはいけない、だから殺す。

わたしの子供もいまは実験室にいる、

これは決して殺戮ゲームのためなんかじゃない。

あんた、妄想狂だろう。

くだらない話だ。

殺しの動機にしてはできすぎてる。

ほんとうのことをいってくれ。

なら、こういうのはどう？

わたしたちは一般社会から疎外されたものを殺人者に仕立てることで、

あらかじめ社会の不安定要素を減らしてるとしたら？

そうだとしたら、おもしろい。

しかし、そんなものはなんの利益にもならないね。

ばかげたユートピア思想だ。

なら、どうしたら納得できるの？

まあ、現実的にどうやっておれの身の安全を保障してくれるかってことだ。

おれは好きで殺しをやったんじゃない。

身を守るためだ。

今後も敵が現れるたびに殺すような、

殺されるような現実は欲しくない。

だから、おれについての情報を抹消し、

おれの生活をもとに戻してくれ、

そして少しでもいいから口止め料をくれればいい。

なるほど、そんなことだったわけ？

ああ。

なら、いま手つづきをしてあげる。

女はでてった。入れちがいに執事が飲みものを持ってきた。スコッチと特濃牛乳、氷だ。まずは氷を入れ、濃いめに酒を入れ、そのうえから牛乳を注ぎ、マドラーでステアした。そして呑む。あきらかに酒は濃すぎた。でも、うまい。そのまま3杯呑んだ。こんなときにおれは警戒心を喪ってしまうんだ。薬が入ってたみたいで、おれは床に手について、米つきバツタのように全身で撥ね、そしてエレベータのボタンを押した。かの女が現れる。おもったよりも、画質がいい。画角も申し分ない。4Kウルトラの女だ。電熱器で即席麺をつくる下着姿の男が、筋肉を見せびらかす。おれは驚いて、土間をめぐる通勤快速で、手を切ってしまう。それでもスコッチがまだ黄金だからか、緑色になったかの女の髪が上映できない。信号燈の瞬きのなか、枯れ葉が舞い、スケルツォが流れる。おお、時よ、城よ。言葉なんか逃げて吹っ飛ぶだけのことだ。ふいに植物たちが振動する。これが最期の戦いなんだ。おれはふくらはぎからくるぶしまでダクトテープで武装し、いまジャックナイフの鞘を払った。

*

地下の実験室のなかには大勢の人間がいた。年齢も性別もばらばらなひとびとが高画質8Kモニターから流れる、高等数

学の講義をみんなが聴いてる。どうやら三角法についてだった。おれにはまったくわからない。でも、だれもがノートをとって、勉強してる。いったい、なんなんだ。おれはまだジャックナイフを握ってる。天使たちを殺すわけにはいかない。わたちたちの天使、気に入って頂けた？——おれのうしろに女が立ってた。

気に喰わないね。

まるで単だ。

まあ、失礼ね。

これが人類の要なのよ。

いいだろう。

おれはぜんぶ忘れてやる。

そうすることね。

おれたちは2階にあがった。書斎に入って、かの女から金を受け取った。そして企てのすべてを聴いた。でも、もうおもいだせない。かの女の唇しか、記憶にはない。かの女の顔さえ、もはや憶えてはない。どんな髪型だったのかも。

おれは森のなかで標的を見つけた。空気銃を構え、伏射の姿勢で、首を撃ち抜いた。いったい、なにがどうなってるのか。

おれはどうしてひとを殺してるのか。かの女と取引したのはずだ。金だつて懐に入りきれないほどにある。でも、これが保全活動なんだ。暮れる日のなかで、幽かに光るもの、流れる血の光沢、おれは15歳くらいの少年を猫車に乗せて、車へと運んだ。でもおれには免許がない。かの女には失効したとはいわず、はじめからない、運転できないといってあった。だれかが車を運転しておれを残した。手をふる。それからアパートに帰る。ここはどこだ？　どうやら兵庫区のようなだった。なんとか列車に乗って、三宮で降りた。地下鉄で新神戸にいき、アパートの室に帰った。だれもいない。棄てられたコンドー

ムが悪臭を放ってる。ごみ罐の蓋を閉じた。

時間は17時半、すっかり暗くなった夕暮れのなかで、おれは窓をあけ、そこを確かめる。歩いてる人間はない。生きてる人間もない。この世が地獄や煉獄と地つづきだってことをおもい知らされる。どうしておれがこの場所に存在してて、別の場所にはないのかどうかってことを考えてみる。たわいもない戯れごとだ。やることがない。とりあえず、映画を観ることにした。古い洋画をいっぽん、あたらしいものをいっぽん。後者にはハリー・デーン・スタントンが主演してた。最期の出演作だ。好い役者だった。かれはブコウスキーの友人でもあったつけ。どうにかこうにか、時間を潰して、夜を過ごした。

あしたで9月も終わり。ようやく金が入ってくる。来月はとにかく委託販売を始めよう。おれの作品をひろめていくしかない。喰っていかなきゃならないんだ。福祉は削減されていくだろうし、就職するには歳を喰いすぎた。特にこれといった技術も持ち合わせてない。そう来ればできることは限られて来る。そういえばかの女は毎月金を送るといった。おれの才能に賭けてみることも。ほんとうのところはなにもわからない。ただいまは安い酒を買って呑んでる。無難にジョニ黒やりながら、屁をこく。まちがいだかけのおれの人生に乾杯だ。世界はおれなんか待ってないのは、とうの昔にわかってる。けれども、生きる以上は書かなくちゃならない。ほかのひとよりも10年は遅れてしまったという意識、さもなくば終末が訪れるまえに生まれてしまったという意識がおれを苛む。過古から未来へと、触れるのが怖ろしくなるほどの寂滅の響きが、おれの足許を掬う。生まれるという事実、その無欠なる欺瞞とともにおれは人類を蔑む。天使たちはそんなふうに考えたりしない。かれらかの女らは無欠なる欺瞞を、おれの無垢の源泉と捉え、樂園のなかに棲む条件と考える。ばからしい、思想家ごっこなんかしてる場合じゃない。おれはまたしてもひとを殺したんだ。でも、もうやらない。電話がかかってきた。女の声がして、おもわず、おれは「もうやらないからな！」と呶鳴ってしまった。

え？——あもう、こちら電気料金の件でお電話したんですが？

あ、そうですか。すみません、取り込み中でして。

では、きょうは？

いえ、またいずれかに。

おれは金勘定をした。ざっと1千万があった。惜しむらしくは、それは1千万円分の普通紙だったということだ。おれは紙を可燃物の袋につめて玄関に置いた。じぶんの存在の空虚さを埋めることがどうしてもできない。いくら過古を漁っても、おれの慰みになるような声や、人物はいなかった。どうやら葉が切れてしまったらしい。

あくる日の未明、おれは六麓荘にむかった。かの女を縛りつけ、執事を閉じ込め、地下の天使たちをぜんぶ逃がしてやった。かれらかの女らは屋敷から世界へと放たれ、おれは女から金をせしめようとした。しかし、そのとき歴史が呼吸した。恐慌が起こり、ひとびとが獣のように雄叫びをあげ、ドクター・ペッパーの看板がすべて落下する。転覆し始めた地平で、なにもかもが誤解と錯誤の種になる。体感幻覚で苦しんだ、かつてのおれのようにみんなが身体の異常を訴える。判事は不在、検察官は非在を表明し、裁判所が架空になる。そしてついに、第3次世界大戦がはじまる。要するに記憶を取りもどした、このおれが地下組織に加わるまでに、そう時間はかからなかったってことだ。

*

バナナな日

*

とにかくバナナだった。函のなかのバナナ、作業台の上のバナナ、廃棄袋のなかの黒いバナナ、女の手のなかのバナナ、そしておれの手のなかのバナナ、おれの股間にぶらさがっているバナナ。おれは通称ゴカイで作業をしていた。薄暗い倉庫の別棟の5階で、男3人、女6人だ。とにかく澱んだ空気が鬱陶しいなかで、パレットに積まれたバナナの函を降ろし、作業台に中身をぶち撒けて、それから袋をやぶって一列に並べた。バナナはおれの腕のなかで重みを増し、まるで重力の法則が少しづつイカれてしまうみたいにして時間が進んでいく。おれはバナナに取り憑かれたのか。パレットはやがて空になった。すると次ぎのパレットを年増女のフォーク・リフターが運んで来る。ぴっちり、隙間のないやり口で。だからおれはふたたびバナナを、バナナのなかで思考し、バナナとともに汗を掻いたのが、2年まえの夏だ。できのわるい悪夢のようにむかひの若い女がバナナの蔓に鋏を入れる。そしてビニール袋に小分けして、段ボールにつめていく。おれはおもった。質のわるい冗談だって。それでも離れにあるべつの倉庫で、バンダシをやってるよりは遙かにマシにおもえた。その瞬間またしてもバナナが作業台に溢れ、おれは慌てて零れ落ちようとするバナナを堰き止める。バナナはバナナだ、バナナでしかないという事実。感傷の余地のない労働のなかでおれは耐えた。耐えるしかなかった。やがて休憩の時間になった。ほとんどやつらは階下へむかう。おれと、むかひにいた若い女、そしてその友人だけが残った。かの女たちはいつもおれに質問する。

好きな食べものは？

えっと、——リングイネ。

なんですか、それ？

パスタの1種です。

そして沈黙。

似てるっていわれる有名人はだれですか？

え？——カズオ・イシグロ。

また沈黙。

お昼、なに食べましたか？

エナジーバーを。

さらに沈黙だ。かの女たちは、うんざりするような退屈な質問をくり返す。おれは適当に答える。かの女たちはハナから興味がないみたいにおれの答えを聞く。あきらかに侮蔑の色があった。でもおれはなにもいえなかった。はじめてこの倉庫に来たときも、20歳そこそこの、ショートカットの女の子から年齢を訊かれた。なかなかいい娘のように見えた。かの女は答えを聞くと、そのまま去っていつてしまった。それからはない。いったい、なんのつもりがあるのかもわからない。スベタめ、とおれはおもった。なんでほっておいてくれないんだ。女も男もひとのことをやたらに詮索しやがる。おれの物語、おれの事情、おれの叙情、おれの教養詩、おれの叙景のすべてが、いったい、おまえらのなにかかわるというんだって？

いつだったか、女3人と街で出会ったことがあった。ひとりが「どこへいくのか」というから、「医者へ」とおれは答えた。

すると、その女はいうんだ、「一緒にいきましようか」って。真顔でひとをからかってやがる。明らかな意志を持っておれを侮辱しようとしていた。性根のくさった女たち。かの女たちはじぶんの腐れまんこに、廃棄のバナナを突っ込むべきだった。

おれは他人にうんざりしていた。肉体労働者たちのゲスな話題、その標的にされることを心から厭いてしまっていた。男たちは、女に較べれば我慢のできるやつらだった。将来の保障のないやつらは時折おれをほんとうに気づかい、心配してくれたこともあったし、笑い飛ばしてくれることもあった。それでも達しがたいのは、おれの読書をからかい、「おまえに本なんか読めるのか」と突っ込まれることだった。おれはやつらとちがって、一端の教養人だというのに、それが理解されないとおもしろい、怒りもした。

なに読んでるんですか？

え、——あの、推理小説です。

おまえ、本読むのか？

ええ。

わたし、推理小説だったら最期から読むわ。

犯人わかってから読む。

フォークの年増が嗤った。不愉快な笑いだった。エレヴェータに乗って、5階へ。15時の休憩が終わったんだ。みんなが所定の位置について作業を始める。バナナはまだまだ有った。おれの自尊心を粉々するほどにあった。おれはじぶんの屈辱について、うまく適応できないでいた。なにか、癩に触ることがあるたびに、それを処理できず、長期記憶のほうへ押しやって、自我を抑圧してしまっていた。なんだって、どういつもおれを珍獣みたいに扱うのか。たしかにおれは自閉症スペクトラムで、アルコール性の痙攣に悩まされる、愚かな男だったが、いままで他人の沽券を踏みにじるようなマネはして来なか

ったし、いつも沈黙を以て、他人を尊重してもいたんだ。おれにはおれの紳士協定がある。それだのにされることは不快なことばかり。だれもが蛮族の雄叫びをあげておれをバウンドさせる。おれはいつも破裂しそうなぐらいな気分で耐える。それだけだ。ひとはなぜこうも口さがらないのか。労働環境のせいとか、将来の不安からか、はたまた将又家庭生活の破綻からか。どうでもいい考察をくり返し、時間を見る。あと2時間半、あと2時間15分、あと2時間5分と……。

プレート、持ってきてください。

無愛想な寸胴女がおれにいう。プレートは倉庫のエレヴェータまえにあった。ヤマト運輸だったらオリコンと呼ばれているものだ。おれはかの女に渡す。女はおれのほうを見ようとせず、片手で受けとった。なんて忌々しい女なんだ。鼻が驚みに尖っている。女たちはみな黄色い上っ張りを着て、男たちはサイズの合わない作業着を着ていた。廃棄のバナナがプレートをいっぱいにした。おれはそれを持って、ごみ袋に運んで入れた。いっぱいになった袋はビニールテープで口を閉じた。バナナはパレットから作業台へ、そこから袋に小分けされ、箱に入れられ、蓋をされ、最後方にあるべつのパレットに積みあげられていく。やがてぜんぶの函が終わった。小さく喘ぎながら、胸を反らす。そのときだった。

ナラザキさん、お腹でてますね。

むかいの女が冷たく言い放った。そして隣の男が笑いながら、

すっごいでてるなあ！

そういった。喜色満面とした顔が汗でぬめっている。おれは久しぶりだった。こんなにも悪意を隠そうとしない人間どもに出会したのは。そうだ、中学生以来だとおもった。あのときはぶ厚い唇をやたらめったに揶揄されたものだ。嗤われたものだ。こんなところで記憶と経験の再生産が行われるとわかって胸くそがわるくなった。バナナをひと掴みして、やつらにむかって突撃したくなった。15屯の重りと、セルフデイフエンスが必要だった。

その通り。

なんとか声を絞りだしたものの、それは別人みたいに弱々しかった。その声の響きには憂いさえあった。それにしても腹のことをわざわざ、この場でいうなんてどういう神経してるんだ、あの女？ でも、あと1時間の我慢。おれとやつらは階段を降りた。最後の1時間、これから5番倉庫で林檎の検品があるからだ。地上へ降り、道を横切り、機械類のまえを通って倉庫に来了。冷蔵の効いた、寒いぐらいの場所で、ローラー台を準備し、パレットの林檎を流す。どうでもいい仕事だ。いままでやって来た、どの仕事と同じように、おれでなくとも勤まる仕事だった。だれでもいい仕事だった。肉体労働によって消費されるおれの人生の時間。おれだけのものはずの時間が、どうだっていいことで消えてしまう。幼少からずっと働いてきたのに、どうしていまだに仕事に馴染むことがないのか。それが大きな疑問だった。辛い場面なら、もうずっと体験しているのに、それが鈍磨しないのはいったいの料簡なのか。神のいない国で、たったひとりぼっち、より良い選択肢もなく、うずくまるように墓穴を掘るのはなんの因果なのか。だれもかれもが馬鹿に見えた。でも、いちばんの馬鹿で、場違いなのはこれのおれだ。ずっとずっと、いままでも、これからおれは部外者なんだとおもった。

就業10分まえ、おれとやつらは室を掃除した。ごみを集めた。袋に入れた。袋をパレットに乗せた。同時におれは、おれ自身の考察を袋に入れ、パレットに積んだ。そして手持ち無沙汰のまま、あたりを観察するみたいに歩いた。むかいの女が不意に近づいてきた。なにをいわれるだろう。おれは身構えた。心のなかで追い払おうとする。

その髭、アサハラシヨウコーを意識してるんですか？

沈黙。おれはなにも答えなかった。かの女を睨みながら、かの女を怖れていた。

いいえ。

終わった。仕事だ。ビニールのシャッターがひらき、作業員たちが退去していく。その群れに潜り込もうとおれは歩を

早めた。さっきのばか女がほかのばか女どもに話すのが聞えた。

ナラザキさんの髭、アサハラシヨウコー意識してるんだって。

おれはおれの髭を撫でた。いったい、それがなんだっていうんだ。女の底知れぬ悪意に怯えながら、おれは協同クリエイトにもどった。着替えをし、2階の事務所で日当をもらい、階下に降りる。女たちはまだ上でわいわいやっているところだ。男たちも雑談に忙しい。それを狙っておれはあの女の自転車を見つけると、サドルにむかつて尿いばりをした。バナナ女め、くたばりやがれた。——おれが立ち去ろうとしたとき、中年男がこっちを見ているのに気づいた。いつも帰りに一緒になる男だった。一瞬戸惑った。でも、ここでは紳士協定だ。おれは「おつかれさまです」と会釈して、そのまま、いやできるだけ早く、帰途に就いた。バナナはもうたくさんだった。もう2度と見たくない。港湾都市の交通網に逃れ、自身を慰め、時のさまざまななかでさ迷うおれの映像が、いっせいに共有され、そのほかの情報とともにバナナの隠語として昇華されるのをおれは室に帰っても、しばらく忘れられないでいた。

*

アルコールはもはや、

*

アルコールはもはや、かつてのように気持ちのよいものでなくなった。かならず連続飲酒と悪酔いが待ってる。つぎの朝には起きることもできない。だのにやめることができないでいた。

あたらしい仕事が決まった11月20日の朝、おれは寝過ごしてしまった。バスは8時10分に出発する。だのに時計は8時26分を指してた。おれは電話をかけた。人足寄せの男に話した。

「バスを逃してしまったんです」

「ロータリーでバスがわからなかったんですか？」

「ええ」

「わかりました。——じゃあ、交通費持つので岡場までいってもらえますか？」

「ええ、いきますよ」

おれは湯浴みした。そして着替えると慌てて、地下鉄にむかった。¥680払い、新神戸から岡場までの切符を買った。9時に谷上に着いたものの、三田方面の列車は20分まで来ない。ベンチに坐って朝餉にカレーパンを喰う。おもったよりもひとは多かった。やがて列車に乗って、ゆられる。車窓の眺めはどんよりとしてた。小雨が降って、靄がかかった窓を知らない町が過ぎていく。やがて岡場に着いた。改札をでる。この土地に来るのはいつぶりだろうか。公衆電話を探してそとを歩い

た。生憎とロータリーのやつは故障中の紙が貼られてた。デパートへの階段をあがった。それからストリート・ピアノで映画『ベティ・ブルー』のテーマを弾いてみた。時間がない。ほんとうに時間がなかった。北区役所分所がちかいのをおもいだして、むかった。入り口の奥まったところに公衆電話があった。

「もしもし、いま岡場です」

「どこにいます？」

「役所のなかです」

「え？」

「電話を探してたんです」

「じゃあ、改札でたところで会いましょう」

おれは切って、改札まで歩いた。デパートはイオンになり、テナントにエディオンが入ってる。改札向かいのスーパーでは服を売ってる。支柱に20円置いてる。盗んだ。やがて担当者が来た。身ぎれいで洒落好きといった感じだった。凝った柄の上着に、シャツ、ズボン、目立つ時計。そして車はフィアット500だった。内装もしゃれてる。おれはかれの車で工場へいった。ここには23歳のときにも仕事でいった。お歳暮の見本品の仕分けだった。あれから13年も経ってる。

「弁当はありますか？」

「ええ」

「まずはこの2階にいつてタイムシートの記載をお願いします」

工場のそばにある建物をあがった。錆びだらけの階段を急ぎ、室のなかでタイムシートに時間となまえを書いた。給与の振込先を報せるための書類をもらった。それから薄いジャンパーを着、そとに降りた。

「軍手、ありますか？」

「ありますよ」

「じゃあ、とりにいきましょう」

またしても階段をあがった。靴から軍手をとって降りた。倉庫に入ると、いやに寒かった。冷たい空気のなかをふたりして歩き、それから作業場に入った。もう1時間ぐらい遅れてる。担当者が挨拶をする。おれは頭をさげて、作業に入った。まずはピッキングだ。冷凍倉庫のなかから、伝票の品を持って来るだけだ。ひとりの老人がおれに仕事内容を教授する。倉庫はたまらなく寒い。借りもののコートを着て、おれは働いた。1時間ほど、それをやって、あとは使用済みの函を折りたたんで、カゴ車に積む作業に移った。そいつはなかなか終わらなかった。12時35分になってようやく終わった。腹が減った。運のわるいことにおれが昼餉のために買ったのはハムだけだった。ハム工場でハムを喰う。それから便所を探してあたりを歩いた。見つからなかった。仕方なしに倉庫街の食堂へいこうと歩いた。どこにあるのかなんて、もうわからなかった。けっきょく野球場のゲートのかげで済ました。それからエナジードリンクを自販機で買った。小銭がなくなった。帰って、仕事にもどった。

やることといったら、ずっと段ボール函の折りたたみと積みあげだった。おれの頭のなかでずっとandymoriの歌が流れてる。歌いづらい歌だった。おれはずっとずっと節回しが、リズムが憶えられないでいた。やがて3時、30分の休憩。それが終わってもどるときだった。おれはジャンパーを忘れた。引き返す。今度は軍手を忘れた。リーダー格の人間にいつて、取ってくるのを赦してもらった。そして工場をでるとき、おれは通用口がわからなくなってしまった。

「なにしてるんや？」

作業員がおれにいった。

「出入り口がわからないんです」

男は倉庫のほうを差した。

「いや、そこにでるところです」

「あそこだ」

おれは歩いてった。紐でゲートをあけた。そして通用口に行く。慌てて軍手をとって、作業場に引き返した。ほかの男がおれの仕事をやってる。気まずくおもうも、おれは作業にもどった。なんだか積み方がわるいといわれながら、仕事を終えた。そこにでる。休憩室にあがる。ジャンパーを脱ぎ、紙の帽子を脱ぎ、ロッカーの荷物をだした。それから降りてバスを見た。右端に三宮いきのがある。乗って最前席に坐った。暮れていく冬の姿。まあ、港湾労働に較べればマシなほうだろう。保冷室はキツイが、長時間いるわけじゃない。あと2千くらいしかない。帰りに食料でも買っておくのがいいだろう。だって27日まで、金はでないんだから。バスが動きだした。北にむかって進む。あたらしいコンビニエンス・ストアができてる。ふるいほうのコンビニも健在だ。道は高速に入った。願わくば18時まえについてATMの受付時間に間に合うことだ。

時間を見ながら到着を待った。「生田川で渋滞」という電光掲示が過ぎる。バスはトンネルに入った。三宮にでると道路はつまってきた。何台ものバスが犇めいてる。やきもきしながら坐っていると、バスはミント神戸につづく歩道橋のまえで停まった。降りた。歩道橋を渡った。ATMで持ち金を預けた。岡場駅で拾った20円も含めて。

おれはそのまま大安亭まで歩いた。業務スーパーで昼餉のためにカップ麺を買い、帰った。日暮れた通りを疲れきったからだで歩き、アパートにもどった。開けっ放しのドア。点けままの灯り。おれは湯浴みに服を脱いだ。熱々のシャワーを浴びてるときだった。電話が鳴りだした。鳴るにまかせて湯を浴びつづけた。終わって、タオルをかぶって電話を見た。たぶん人足寄せの男だ。そう決めつけて電話した。

「もしもし、檜崎ですが」

「ああ、ずっと電話してたんですよ」

「はあ、すみません」

「バス、何時に到着しました？」

「17時50分です」

「ロータリーのところですか？」

「いいえ、帰りはちがう場所でした」

「そうですか。それとうかがいたいんですが、きょうって途中退出されました？」

「軍手をとりに控え室にもどったことはありますが、許可をとってです」

「そうでしたか、先方さんから無断で途中抜けたと聞いてましてね」

「そうですか」

「それですね、あしたからの勤務はなしということで」

「ええ」

「あちらさんもうちはきびしいところやといってるので。」

「ちよつと今回は適性ではないというのが結論だときつくいわれまして」

「わかりました」

「もしね、檜崎さんさえよければ似たような案件があるんですが、灘方面で、午から6時間ほどの仕事なんですが」

「ああ、でもいま交通費の持ち合わせがないんです」

「そうでした。交通費でしたね。給与と合わせて払うので銀行口座、いいいですか？」

ほとんど感情の変化もなかった。おれは事実を事実として受け入れた。もつといえはいつでもよかった。おれはすっかり社会性のない生きものになってしまったんだから。口座を教え、おれは残金¥990の使い道を考えた。またしても酒を呑むほかにないようだった。きょう抗酒剤を嚥んだというのに。滑稽な、異端の鳥みたいにおれは嘴をあけて、次の餌を待つほかにできることはなさそうだった。暮れた窓のなかで、滑稽な水掻きのように腕をふりました。右の拳が壁に当たって、すりむいた。生きることはむずかしい、特にじぶんに備わった以上のものを求められてるときなんか。おれは腹ばいになって、なにも考えずにいた。それから起きてクレジオの『物質的恍惚』を読みはじめた。この本はむつかしくはない。でも、いまのおれが読むにはぶ厚すぎた。買って読みたい。もし金があるのなら。じぶんに与えられた天性の懶惰、そして非適應性、それらの両腕に組み拉かれておれはまたしても徒寝のなかで眠った。夢には女すら登場しなかった。おれは「女が欲しい」が口癖になってる。でも、それを本心から求めるときはもうすでに過ぎ去った。ただじぶんがひとりぼっちでいることに飽きあきしてただけだった。やがて入るだろう金と、つぎの仕事のために夕餉は喰わなかった。

*

ニンフたちの晩餐

*

ロバート・フロストに目をやりながらも、湊谷夢吉の唄を聴きながらも、森夫は退屈し切っていた。やれることがあまりない、ほとんどない。手の施しようのない人生を冬が横切っていく。表の公園は静かで、たぶんだれもない。アパートの3階からはラブ・ホテルの灯りと電飾とが煌々と窓越しに光って、道々をゆく若い男女のささやきだけが時折に聞えて来る。ついさっきまで書いていた手紙が、かつて書いた詩と、書きだしがおなじだということに気づいて、少しだけ驚いた。手紙はあした、あきる野市へ送るつもりだった。そこにはかれの恩師がいて、かれの作品を評価してくれる。作家はいつも葉書に、ことまかな批評を書いて送ってくれた。来年にはかれの撰で、詩集をだすつもりだった。それでも森夫の心は淋しかった。だれもそばに親しい友人も、恋人もなく、異土の暮らしを送っていると、幾度もなにもかもに倦んでしまう、厭いでしまう。すべてをうっちゃって、逃げだしたくもなる。庭木が風にゆられて、枝葉が窓を擦った。やるせなさに打たれて、森夫はフロストを抛りだして、万年床の世話になった。きょうは疲れた。訪問看護の連中が来ていたし、他人に見られることになれない森夫は苦心して、会話をした。会いたいひととは会えず、会いたくもないひとびとと会わなくてはならないということが苦しい。

この1週間というものの、過古の同級生たちに連絡をとった。SNSで探しまわり、知っているなまえにリクエストを送った。そしてかれはいいふらした、かつての初恋のことを。みんなが笑った。でも、肝心なかの女は共通の友だちがなければ

リクエストが送れなかったし、つくってから送っても、かの女からの反応はない。森夫はわるい酒をやめられなかった。もう10年以上も酒にすがっていた。そして29になったいま、孤立者であることの焦り、悔しさ、怒り、妬みが、森夫にもっと呑めよと唆す。13年もまえのかの女のおもかげを懐い、ただただかの女からの返信を待った。でも待ってられるほど、かれの状態はよくなかった。けっきょくかの女にメッセージを送った。

《小学校と中学校で同級生だった榎崎です。いまさらですが、増村さんのことが好きでした。高校生のころも、絵を描いてるときも、文学をやっているときも、作曲を学んでいるときも、卒業して、建築現場を転々としたときも、アルコール依存症で病院に入れられたときですら、あなたのことがあたまを離れなかった。でも、ぼくはもう人生に草臥れてしまったし、もうなにかもを終わりにしてしまおうと考えています。ぼくが死ぬのはあなたのせいじゃない。ただぼく自身の問題です》。しばらくして返信があった。一瞬森夫は信じられなかった。メッセージをひらいた。

《いろいろと苦労されていたようですね。私のこと、おもっててくれてありがとう！ 勇気がでたよ！》
ふたたびメッセージが来た。

《でも、私には19歳で自殺した同級生がいます。働きのながら好きな美術の道へ進んだ矢先、事故で死んだひといます。奥さんと子供さんを残して若くして亡くなられた方もいます。わたしは命を粗末にするひとはきらいです》

森夫は、とまどって弁解を並べた。そんなつもりじゃないとか、どうかしてたとか、それでも飽き足らず、かれは綴った。救いようのない託けを酔いにまかせて送ってしまった。

《きみは吉田とか牧なんかを友だちにしてるじゃないか。かれらはおれを虐めてた。あんなひとの存在を粗末する連中とはつき合うんだね。正直、ショックだよ》

送った瞬間、なにかもが崩れ落ちてしまった。

《あなたの記憶にある私は今でも中学生の私なんです。彼らだって同じだけの年をとり大人になって過去の自分を恥じることあるだろうし、私だって思い出したいくない過去などたくさんあります。そんなことを言うと、あなたにしたら、どうせたいしたことないのだろうと思うかもしれないが、あなたにとってはたいしたことなくても私にとっては大したコトなんだよね。価値観は人それぞれ。人との距離の取り方も人それぞれ。ただ今の私に言えることは、正直、あなたに対して少し戸惑いがあると言うこと。それは好きとか嫌いとか軽蔑するとかそんなコトではなくて、私なんかあなたの人生を左右してしまうことになって良いのかと言う戸惑いの方が大きい。自分に責任は持っても人のコトまで責任を持てるほど出来た人間でもそんな器の人間ではないと思うから》。

それきり、増村友季子から返信はなかった。かの女の辞が棘となってかれの身体中に突き刺さる。汗まみれになって、森夫はなんどもメッセージを送った。返信はない。やがて心は荒みきって、かれはかつてじぶんを攻撃した、あらゆる人間に仕返しをした。「おまえはおれを虐めてただろう？ おれの心はまだ癒えちゃいないんだ」といい、されたことを列挙した。ものを盗られたり、隠されたり、癩菌扱いを受けたり、ふいに背中を革ベルトで鞭打たれたり、通すがりに悪口をいわれたり、席を離されたり、便所で撲られたりを。かれを苛めた女たちはたやすく謝って、そして男たちはかれを一切相手にしなかった。せっかく友人として迎え入れてくれたひとびとにも、森夫は容赦ない辞を繰り返し、タイムラインに憎悪を垂れ流した。ひとびとはみな、かれをきらって去っていき、かれはまたしてもひとりになった。だれもかれを心配などしなかったし、かれの変わりようを気にかけて、助言すようとする人間もいなかった。かれはじぶんがはじめから求められていないことに気づき、不眠症の夜々、港まで歩いて過ごした。繫留船のまえで植え込みの縁に坐り、釣り人や、ランナーたちを眺め、朝が来るまで、毎日のように通った。

あたらしい年になって、3月に詩集を出した。ほとんどが恩師の紹介で売れていった。住所を調べて増村友季子にも送っ

た。反応はない。夏になって、知人からアコースティックギターを貰った。はじめて歌ものをつくるようになった。曲ができれば、すぐにデモを録音した。しつこくかの女のことを歌にした。やがて秋になって、ライブにもでるようになった。参加費の安いイベントで2曲ずつ歌う。いつか、かの女が森夫を見いだしてくれるのを祈りながら、ライブハウスの門扉に立った。もちろん、そんなことは叶うわけがないと、かれ自身わかっていてもいた。それでもどこでかの女のことを懐いながら、かれは舞台にあがった。

*

《ひとを傷つけるひとはきらい！》——12月の終わり、ライブを翌日に控えた土曜の夜にSNSを見た。友季子は1年ぶりにそう返信して、森夫をブロックしてしまっていた。顔面に打撃を喰らったようにかれは感じた。なにもできることがない。未来も将来も、ビジョンもなにもかもが破壊され、頭上を爆撃機が去ってしまう。ドラマではありふれた拒絶の場面だった。でも、森夫には演出家がへまをやらしたようにしか見えない。それでも、いままで見てきたどんな悲しい結末の映画より、映画のだった。けつきよくライブは途中退場してしまった。泥酔して演奏はひどく、呂律もまわっていなかった。それからなんども、友季子と対話する手段を考えてみもした。第3者を通じて詫びを入れるとか、手紙を書くとか。けれども、なにをどう考えようにも立ちはだかる壁の厚さはどうにもならないようにおもえて、けつきよく森夫はなにもできなかった。けつきよくかれは精神病院の門を潜った。4ヶ月ものあいだ、入院生活を送った。6月半ばになって退院が決まった。それでも森夫の病理は癒やされなかったし、なにひとつ解決しなかった。ただ院内で知り合った10歳もうえの女に恋情を憶え、なんとか電話をしたりした。告白だってした。かるくあしらわれ、それでも本心は友季子のことといっぱいだった。

通院していた診療所をセンタープラザの心療内科に変えた。そこでなら無料のカウンセリングが受けられたからだ。森夫はいままでのこと、生まれてからのすべてを話した。気分が軽くなった気がした。けれども、それだつて一時のこと、夜になればまた友季子のことばかりが夢にでた。かの女への憾み、憬れ、怒り、それらが混じり合つて、神経を駆けめぐる。森夫は遺影を撮ろうとおもひ、写真家を探した。2万かかつて、4枚の写真を撮影してもらつた。自裁しようとおもひ、バルーン・タイムを買つた。それから頭に被るビニール袋や、その口を閉じるためのヘアバンドなんかを買つた。それでも実行にはけつきよくできないでいた。気づけば37になっていた。遺影となるはずだつたものは物入れに、バルーン・タイムはガスを抜いて棄ててしまった。いまは絵を仕事にして暮らすようになった。もはや以前のように友希子の夢で悩むことも、両親のことで悩むこともない。暮らし向きもわるくない。ようやくじぶんを受け入れてくれる世界を見つけたのだ。

うち棄てられた納屋の暗がり、かれは天井を見つめる。その虚空のなかに幻を見いだそうとするように、じつと直立していた。それほどおれはわるくない、ちつともわるくない、わるいのはむしろかの女のほうだ、――檜崎森夫はそう考へてみた。メッセージを黙殺しつづけた友希子、じぶんを見棄てた母や、そしてかれに無関心だつた姉妹たち。わるいのはかの女らであつて、じぶんはそれほどじゃない。暗がりのなかでそう結論づけてみた。やがて気分を変えて納屋をでた。山を降り、坂を下り、新幹線の高架を潜り、熊内町から生田町へ帰つた。そしてアパートで一通の葉書を見つけた。パーティーの招待状だつた。差出人のなまえはない、ただ場所は小学校だつた。いったい、なんの催しなのか。室に入り、パーティーに見合う服を探した。できあいのスラックスとボタンダウンのカッターシャツ、そしてブーツを見つけだして、身につけてみた。まあ、わるくはない。――そうおもつて、森夫はいくことにした。いったい、なにが起こるのか、夢想しながら。

*

夜は、死んだものの臭いがする。白樫の植木のかげがまるで人間のように延びている。地上に昏く月がゆれ、その陽差しのなかで少女がひとり縄跳びをしている。いったい、なにが起ころのか。路上駐車の群れが坂の中腹までつづいている。やがて小学校の門扉が見える。どうしてわざわざ北六甲台までいかなくちやならないのか。こんなところからは早く逃げたいと森夫はおもう。

中空をからすが姦しい。ふいに路上を見る、使用済みのコンドームが落ちている。気分がわるい。森夫が門扉でぐずぐずしていると、停まってある車から、知らない男女が降りて来て、かれを見る。

「どうしたんや、早う、入れや」

「いや、なんとなく気分が」

「とりあえず、入ろうや」

「ああ」

肯いて入る。空気が一気にのし掛かるような感触がする。体育館まで案内されると、もう大勢のひとびとが談笑しているのが見える。森夫はじぶんの席を探す。てきとうに空いてる席に坐って、まわりを眺める。かれらかの女らはほとんど森夫が攻撃し、罵った相手とその連れあいだった。胸が痛む。それでも、ここまでやって来たんだ。それにもう何年もまえのことじゃないか。そんなことで脅えるなんて滑稽だ。――胸を撫で、呼吸を整える。紙コップに水を注いで、何杯か呑む。壇上ではかつての学級委員の、中村清美が立ってる。やがてマイクを持って喋りだす。

「みなさん、――ようやく檜崎森夫くんが来たようです」

まわりの人間が一斉に笑った。

「かれはみんなを傷つけ、苛み、増村友希子さんにストーカー行為までしました。いまでは、どうやら藝術家と呼ばれてるらしいですが、わたしたちにとっては敵であり、鼻つまみ者には変わりません。きょうはこの席を以て、かれの糾弾を行います」

かれの罪状が読み上げられる。かれのいった罵倒の辞が読みあげられる。森夫はうなだれながら聴いている。できることはなにもなかった。過古の因縁があるとはいえ、ひとを面罵したのは確かだったし、怨みを買うのしかたない。それにストーカー行為も事実だった。3年もまえ、おれは泥酔の挙げ句、友希子の家に押しかけたのだ。かの女の家は学校の裏手にあった。――みんなが小さな悪魔みたいにおれを取り囲む。室温が上昇する。汗が蒸発して塩なる。ざらざらとした皮膚を蟹が這う。すべての女たちが、おれを掴みあげ、叩き、蹴りあげる。もうどうだっていい。なんとでもしておくれ。

「この男をやつつけるのよ!」

「こいつにどれだけのひとが苦しめられたことか!」

「さあ、みんなさっさとぶち殺して!」

男たちも声をあげた。

「こいつはおれの息子を侮辱したんや! 許されへん!」

「そうや、おれのこと、くそぶくろって嘲りやがった!」

「こいつ、ひとりに美味いおもいさせてたまるか!」

豚のようなキーキー声でやつらがおれを責め立てる。死んだ教師の幽霊たちが、うすら笑いを浮かべて鑑賞してる。情けもない光景におれはまったくの素面で、なんの感情もなく、坐ってる。そろそろ首が痛くなってきた。おれの首から女どもの手を払い、その顔面に水をかける。立ちあがって、オードブルの乗ったテーブルをひっくり返し、そいつを掴んだ

まま、勢いに任せて身体を半回転させる。女たちをなぎ払ったあとで、次は男たちを片づける。花瓶に花を装填し、遊底を引く。そしてフル・オートにして幽霊諸共、ぶち殺す。近所だった澤村透も、おれをクラス会に呼んだ戸上松子も、よく知らない萩原苗子も、宮野や、浪立陀助も、まったく憎しみもないやつらをも撃つ。次は百合の花だ。抜群の花薬力で焼き払う。次は雛菊だ。ペキンパーの映画のようにばらばらになって崩れ落ちる人間たち。おれは最期に中村清美を殺す。やがてまわりは静かになった。おれは体育館をでて、門扉にむかって歩きだす。そのとき、どうしたわけか、増村友希子が姿を現す。

「えっ？——生きてたん？」

「そうらしいな」

「どうして——、まさか、——」

かの女は息を呑んだ。おれはまだ花瓶を持ったまんまだ。花はまだある。これさえあればかの女を好きなようにできるかも知れない。でも、おれは花瓶を棄てる。それは音を発てて碎け、破片が飛び散った。ああ、でもこうするべきなんだとおれはおもう。けれども、おれがかの女から眼を離す一瞬、友希子はバター・ナイフでおれの腹を刺す。刃が1回転して、やがて赤い前掛けのような血が下半身を濡らす。おれは膝を折ってくずれ、やがてなにかも見えなくなる。それでもどうしたわけか、かの女をきらいになれないでいる……。

*

森夫は列車のなかにいた。どういうわけが下腹部に痛みを憶えた。なにがあったのか、どこにいていたのかもわからな

い。ただ腹が痛む。列車は、福知山線を大阪へむかつてる。やがて尼崎に着き、そこから神戸線に乗り換え、三宮へ帰った。時計を見た。16時半だった。いまからなら、診療所に間に合う。きょうはカウンセリングを受けて、たっぷり話をしようとおもった。センタープラザの7階で診察を待った。もう10年もまえに元町の神経科で見たことのある、パンク・ファッションの中年男がいた。あいかわず、鼻をぐずぐずさせて、落ち着きがない。どう見てもヤク中だ。1時間待ってカウンセリング室に入った。最近の心境を話した。

「たしかに檜崎さんがいうように、じぶんを過小評価、あるいはわるい部分だけを拡大解釈していたところがありますね。これからなるべく、じぶんを好くおもってくれないひとや、友好的ではないひとのかかわりを避けたほうがいいでしょう。檜崎さんはわるくないし、あなたの親御さんや同級生にされたことを、いつまでも拘泥するよりも、かれらがわるいんだとおもって、これからは好きに生きていければいいとおもいますよ。もちろん、ご自分の責任の持てる範囲でね」室に帰るともう18時だった。夕餉にフジッリを喰い、プロテインを呑んだ。描きかけの絵や、構想、これからの予定を確かめ、PCで日記を書いた。ふいに電話が鳴った。慌てて、とってみればなんだか騒がしい音がする。パーティーのようだ。だれかがなにかいっている。

「すみません、だれですか？」

「わたし、榎波詩織ですけど」

小学校時代、おなじく絵を描いていた女だった。たったひとりだけ、いまでも親交のある同級生で、年賀状のやりとりもあった。

「いま飲み会やってるんだけど来ない？」

「だれと一緒になんだよ？」

「櫛谷さんと、黒埜くんと、それから増村さん」

一瞬、声がつまる。

「やめとくよ」

「えーっ、でもモリオは増村さんのことが」

「いや、もういいんだ」

「でも、好きなんじゃ？」

「いいや、もう終わったよ」

電話を切って、森夫はしばらく考えた。でも、いまではもうなにもかもが昔とはちがう。いまさら友希子に会っても、なにひとつ過古を取りもどすことも、あたらしい親交を結ぶこともできないだろう。そうおもって森夫はPCの電源を落とし、書きあがった下絵をペンガラで転写して、日本画風のイラストをいちまい描きはじめた。うまくいきそうだ。けっきよくおれも、じぶんのつくりだすモノのなかでしか生きられない。少なくとも、おれはそれを知っている。おれはわるくないし、かの女の仕打ちを、いつまでも拘泥するより、かの女がわるいんだとおもって、これからは好きに生きていけばいいんだ。もちろん、てめえの責任の持てる範囲でだ。――森夫は仕事を終えて眠った。天井の蜘蛛がかれを狙っていることをかれはまだ知らないでいる。――**気をつけろ。**

*

*

散水機が回転しながら水を撒き、青い芝のうえに曲線を描きつづけている。真昼のこの町もすっかり秋になった。母さん、聞えますか？——いままさにむかいの犬が吠え、やがて交尾の喘ぎが聞えて来ます。あなたがぼくの犬を棄てにいった夜、あなたの眼ン玉めがけて唾を嘔き、罵ったときをきのうのように懐いだす。ひとはなんと愚かなのか。だれかが一方的に正しいとされる時代はもう終わりました。安全と安寧を祈って、この土地では秋祭りがひらかれます。来週の、10月7日だ。ぼくは是非ともあなたに来てもらいたいとおもっています。娘の葉月は6つになったというのに、じぶんの祖母の顔さえ知らないというありさまです。どうか、来てください。

あたらしいキーボードを買ったから、験しにこんなことを打ち込んでみた。わたしは母の現住所を知らないし、もちろん娘なんかいやしない。結婚もない。3年もまえだ、母が癌であるといとから教えられたが、おれはそいつを含めて、過古を締めだした。なんだか、論説めいた文章になってしまいそうだ。わたしは不安に駆られてる。よくわからないけれど、不安が高波を打ってる。

散水機はとまった。たったひとりの作業員が庭をまわって、やがてビルのなかに消える。わたしは3階からそれをちっと眺めてた。終わったんだ。確かめてから、わたしは無線に耳を澄ませた。父親がハムをやったかかわりで、わたしも機械をいじりだしたのは15歳の夏だった。高校受験の気晴らしに他人の会話や、ひとりごとを傍受しては、おもしろかったこと

や、その周波数をノートに記録して遊んだ。ひと殺しのセクト宗教の演説や、誇大妄想狂のばかどもが、わたしにとって隣人になった。いまは警察無線の盗聴はじめ、車を走らせては事件や事故の現場にいき、カメラを構えてる。週末には旅行にでかけ、走りながらいろんな現場——世界でほんの少しだけ有名なれた土地を流れる。でも、きょうはまだ金曜日。旅はあしたからの予定だった。朝から二宮をでて、大阪へ入って、そこから区外を廻ろうとおもってる。まあ、なんてことはない旅だ。

無線からはいつものように隣人の室から実況中継が聞えて来る。だれかが仕掛けた盗聴器がものをいう。若い女のたわいもない会話がする。わたしはヘッドホンに切り替えて、そいつを大音量で聴く。かの女はこれから風呂に入るらしい。だんだん、かの女の声に興奮を憶えるわたしがいる。片手で陰茎を上下運動させながら、脳内でかの女の声を賛美した。いつも交わされる何気ない挨拶の記憶さえも、こういったときには性欲を駆りたてる道具にしかならない。おれの手のなかで亀頭がうえを向いた。精液が迸り、タオルのうえに発射された。わたしはヘッドホンを外して、手を洗いにいった。それから水を呑み、ほかの周波数へと、ちがうムードへと移行してった。

朝になってわたしは車をだして、町をでた。高速には乗らない。あくまで一般道で情報を探った。不審者、痴漢、万引き、やくざ——そんな話ばかりで退屈してしまった。絵になりそうな放火や、強盗、殺人や自殺の現場には、きょうはありつけないのか。わたしは休憩のため、スーパー・マーケットに車をつけ、飯を喰うことにした。パンとコーヒで済ました。やがて日が暮れて、宿をとった。無線を聴きつづけたものの、大した収穫はなかった。くだらないラグチューばかりだ。そしてその翌る日もなかった。わたしはバカらしくなって、帰りの道では、なにも聴かなかった。

*

あたらしい仕事、作業所の仕事が始まった。住宅地のなかにある小さな作業所で、老人や精神障害者たちが雑貨の梱包材を組んだり、貝殻を磨いて装飾品をつくったりしてる。わたしの仕事は、大半がかれらを見守ること、あと質問に答えたり、見本の品を見せたり、体調を気づかうふりをするにある。つくり笑顔で顔が痛い。17時には終わって湊川公園から地下鉄で帰る。最近は無線いじりもやめてしまった。他人への関心が薄れて来たのかも知れない。始終、ひとびと狭い空間のなかをともにして、そして帰宅してさらにだれかに興味を持つというのはむずかしい。フルタイムの仕事のあとに、残業をやつてみたいものだ。

そうおもえば早いもので無線は棄ててしまった。わたしにはなにも残されていないように感じた。それまでわたしを規定していたなにかが幻だったと教えられたような気がする。だが、たとえそうであってもわたしには生きる以外になにもなかったし、どうすることもできなかった。しかたなく、ふつうのラジオのまえに坐って、話や音楽を聴いた。だれの秘密でも、隠しごとでもない情報に歩調を合わせるべく、苦心する、心を碎いて、膝を守る、姿勢を正す。毎晩、そいつを繰り返した。やがて心惹かれる声の番組に相逢った。

かの女の声は素晴らしかった。高音域を抑えた、やわらかな声で、ゆっくりと慈しむようにリスナーのメールや葉書を読んだ。毎週末、かの女のラジオを聴いた。できればおれも、そうわたしはおもった。メールを送って、かの女に読んでもらいたくなった。それからわたしは1ヶ月、かの女の番組にメールを送りつづけた。たった1度だけ、かの女の声が、わたしの筆名を読み、そして本文を読みあげ、そしてありがとうございますと礼をいつてくれた。わたしはひじょうに満足したものの、どこかで冷めてしまった。ラジオの電源を切って、「もはやなにもすることがない」とだけ、呟いてみた。夜の虚空の遙かむこうで、散水機が暴れだすのを期待した。なにもなかった。

《――神戸市の**さん、いつもお便りありがとうございます。すべてはご紹介できませんでしたが、大変うれしくおもってます。あなたの生活が充たされて、じぶんのやりたかった、ほんとうのことを見つけられるといいですね。わたしはずっとこの仕事をつづけたいし、来年にはなにかイベントでもやれたらなんておもってます。では次の頼り……》。

すべてに敗れて、すべてを失った男のようにわたしの生活は荒んだ。ほとんど理由らしい理由もなく、なにかもがまったくのつくりごとで、でたらめでしかなかったとおもいながら過ごした。作業所の仕事は辞め、倉庫マンにもどった。無線といい、ラジオといい、どれもがわたしの人生を喰い逃げしてゆくのはどうしてだろうか。

*

土曜の夜のコンビニエンス・ストア。ふたりの男が捕まえたアキアカネをわたしに見せびらかす。わたしはそのまま無視して、店内に入った。上半身裸の白人が笑顔いっぱい物色してる。店員はなにもいわない。わたしもなにもいわない。おまえは裸だといっても、だからなに？　といわれたら、もう返しようがない。ウィルキンソンを買ってでた。アキアカネの若者たちはまだいた。ふたたびわたしに搦んで来る。このなにもない男に。かれらはなにをキメしてるのか。大きな眼がわたしを捉えて放さない。勝手にするがいい、そうおもって歩きだした。かれらは着いてくる。どこまでも、どこまでも。アパートのまえまで来て、わたしはふりかえった。

なにか用か？

いやいやいや、あんたのラジオを聴いたんですよ。

ラジオ？

あんたの葉書が毎週読まれてる。

そんなはずはない、おれはもう投稿もしてないんだ、それに。

それに？

住所も氏名も公開しなかった。

でも、かの女はいまもあんたについて放送してる。

放送してる？

わけがわからなくなつて、わたしはアパートの階段をあがった。あの女が、おれを売ったのか、それもどうして？――疑問は尽きなかった。だが、やれることはひとつ、ふたりを閉めだすことだった。でも、一瞬だけ遅かった。ひとりが扉をこじ開け、もうひとりが室のなかに這入る。血の気の引くようなおもいがして、わたしはナイフを握った。木製の柄に鯨の姿が掘ってあった。相手の若造はまったく動じない。

刺して見ろよ！

ああ、そうするさ。おまえを刺しておれも死ぬ。

でも、とわたしはおもった。ほんとうにかの女はおれを売ったのか？

いったい、かの女はなにをいったんだ？

そいつは教えられない。

あんたには死んでもらう。

どうしてだ？

これがかの女の指令なんだ。

もうひとりの男も室に這入って来た。どうすることもできない。窓から飛び降りることもできない。わたしは高いところが苦手なんだ。もうひとりの男がラジオをつけた。あの番組が、かの女の番組がやってる。最近キャラクター作画をはじめたという、かの女はひとりの人物が、ふたりの人物によって追いつめられてるさまを書いてると話す。

《それですね、ひとつの空間のなかに透視図法を使って、人物の配置を決めるんです。時間はかかるけどなかなかおもしろいんですね、これは。今晚、お手紙頂いた**さんも、絵なんか始められたら、もっと充実するとおもいますよ。――では、次の曲です。リクエスト頂きました、The smithsの"Still ill"です。》

"Still ill"は、わたしの好きな曲だった。モリッシーが歌う。《England is mine, it owes me a living》。いまではなにかが極まった状況で、ぴったりの歌かも知れない。男たちはわたしのからだにぴったりとからだをくっつけて、わたしを窓際に追いつめた。かれらの眼のなかのわたしが少しづつだが、消えていく。ふいに歌が終わって、やさしかったはずのかの女の声が、無機質な機械音声のようになっておれに語りかける。

《その恐怖があなたにとっての啓示なのです。たとえばあなたの台所で深夜、鰯が捌かれるとき、あなたのなかにある、もつとも血腥い欲望が目覚めることでしょう。それがあなたの自然であり、あなたの生き方なのです。あなたは最良のリスナーでした。でもそれも昔のこと。便りを寄越さないあなたをわたしは見限った。さて、わたしの古い友だちよ、これは別

の世界からの放送でした。わたしたちが行こうとしているところまで、もしひとつのためらいもなく到着できるとしたら、それほど喜ばしいことはありません。着いたら、もう1度放送をするでしょう。いままでありがとうございます。そしてさようなら、さようなら。》

気がつくと、男たちは消えてた。おもてから凄まじい音がする。窓をあけてみると、散水機が暴走して、作業員が^{みずたまり}溜のなかで溺れようとしてるさまが見えた。わたしはなにもおもわなかった。窓を閉め切って、できるだけ、じぶんの安全を確保しようとした。そしてラジオをぶっ壊した。不燃物の袋に入れた。睡眠薬を吞んで、ウィルキンソンで嘔み下した。たいたいままでのことは忘れよう。わたしはいった、さようなら、さようならと。どうしたものか、しばらく鳴咽しながら。

*

※作中の歌詞はThe Smiths"Still Ⅲ"より引用。

フットサルの現象學

*

バー・ロウライフでの勤務時間は17時から24時だった。バーテン見習いとして年末から雇われ、凄まじい勢いで客をさばいた。仕事はきつかったが、物流倉庫のきつさとはちがひ、多くの刺激があった。12月は客で溢れかえった店のなかを右へ左へ歩き回った。年内業務が終わったその日、森夫はほかの店員たちとともに正月の予定について話した。

「むかしの同級生に会うんです」——しかし、かれと相手とはまったく交流がない。5年まえのクラス会で一緒だったただけだ。小学校では2年と6年、中学校では2年時におなじだったが、大したつながりもない。ただ一時、相手は森夫の描く漫画の読者だったし、家へ遊びにいったこともあった。でも1度だけだ。ある夜、一方的に電話をかけ、会うことになっただけだった。じぶんが求められていないという事実をかれは受け入れることができてなかった。長い失業時代がかれになにを与えたのかは知らない。けれども、鰥夫の寂しい暮らしのなかでかれの内奥が少しずつ毀れていたのはたしかだ。かつての失恋で、自棄になったかれはさまざまなひとびとを罵り、苛んだ。いまではだれもかれを相手にするものはなかった。ひろいインターネットの海のなかでも、かれは友人さえなく、憎悪の詩を書いてばら撒いていた。同級生たちはみなかれがきらいなのだ。だのにまだ、かれはかれらに未練があった。かの女らに未練があった。たったひとりだけ残った女友達——それだつて疎遠だ——を介して、どうにかこうにか、ひとり捕まえたというわけだった。

森夫は給金をオーナーからいただく、冬の神戸を歩いて帰った。わざとらしい幸福感、かりそめの充実とともに正月2

日、かれは新神戸から谷上線で田尾寺駅に降りた。真っ白い息をしながら、ロータリーを歩く。黒いタクシーのゴキブリたちのうしろ、青いスズキのなかで浪越彬が待っていた。しばらく、どう声をかけていいものかがわからないでいた。つづまりながらサイドグラスを小突いて、じぶんの存在を報せた。

おう、ひさしぶりやな。

ああ、あけましてだね。

車に乗り込んだ。話す話題も見つからないなかで車道が流れ、車列のなかにスズキが喰い込む。なんとなく女友達のことを話した。

小川夏美から聞いてるだろ？

ああ、フラれたんだってな。

斉藤さんに。

森夫の顔が青ざめる。かの女のことは初恋だった。SNSでコンタクトをとってみたものの、森夫の社会性のなさが招いた、対話の破綻によってすべてが灰と化した。かれのおもいつめた勝手な感情、それを表現した悲観的な文章がかの女の心を不快にさせた。かの女による1年間の沈黙、そのあいだ森夫は耐えられず、ひとびとを攻撃しつづけた。それがかの女を切り裂き、そして失望させた。募る嫌悪感の果て、かの女はいった、――「ひとを傷つけるひとはきらい！」と。そしてブロックだ。それから数日して酔った森夫はひとを撲った。男の鼻を砕いた。執行猶予3年半である。もう4年まえのことだった。逮捕のことは、小川夏美にはいわなかった。だれにもいえなかった。やがて車は西宮は北六甲台にゆく。

ところで小川さんは元気？

ああ、でもちよっと問題があつてな。

なんや？

結婚した相手に隠し子があったらしい。

えーっ、そらひどいな。

ひとはわからないものだよ。

まさか同級生にそんなことが起こるなんて。

まあ、そやね。

丘をあがった車が住宅地を走る。そして家に着く。森夫が降りる。車が車庫に入る。浪越が降りて来るのを待つ。いったい、これからなんの話題があるというのだろうかと言った。

森夫、免許持ってるの？

持ってる。

でも、軽トラしか運転できないよ。

それでもええやん。

ほんとうは3年もまえに失効しているのをかれは隠した。恥ずかしいおもいはしなくなかった。べつに事故を起こしたわけでも、違反点数をあげたわけでもなく、かれは友人との決別を切っ掛けにみずから免許を棄てたのだ。犯罪逃亡の逃がし役にされたのが、かれの自尊心を傷つけたからだ。いや、傷つけられたと思い込んだからだ。かれはすっかり後悔していた。

あがろうよ。

ああ、ありがとう。

家はおなじ敷地に2軒あった。そのうち、あたらしいほうに入る。小学生のときにはなかったものだ。リビングルームの

テレビのまえでふたり坐る。お節の残りを浪越が勧めてくれた。森夫は海老をいくつか喰った。そしてテレビのサッカー試合を観る。おもしろくもない。かれはいままでにはスポーツには興味はなかった。ただスポーツもののポルノは好きだ。やがて浪越がいった。

母が挨拶したいって。

ああ、そうだね。

立ちあがって戸口に立つ。現れた貌に会釈する。――櫛崎くん、お久しぶりやね。かつこよくなって。――どうもありがとうございます。――ふたりしてリビングにもどる。それから浪越がテレビゲームを持って来た。一緒にやろうという。しかしゲームは接続できなかった。しかたなく将棋を指した。森夫はルールがわからない。教えてもらいながら3度やった。時間がどんどん鈍くなってゆく。話すこともなかった。森夫はもらったビールを嘗めながらテレビの試合を観た。

ちよつとでかけへんか？

ああ、そうだね。

ふたりして近所を歩いた。スーパーマーケットはなくなり宅地になっていた。小学校のまえには家がならぶ。かつて空き地はみんな家々で埋まっていた。歩きながら話したをした。ひと気はまったくない、静かなところだった。

あそこ、江河の家や。

いったことあるよ。

マッキントッシュがあったね。

あいつ、姉さんいるんや。

それは知らなかった。

大山くんっておったやろ？

頭、よかったんや。

ああ、いつも英単語やってたなあ。

あの長い階段のうえに家がある。

いまはどうしてるのか、わからへん。

ふたりは丘を降っていった。長い坂道を見下ろすと、森夫が高校生のときに努めていた、食堂があった。でも、いまでは中古車販売店に変わっていた。

おれ、あそこでむかし働いてたんだよ。

ああ、そうなん？

おなじ中学の女子も何人かいたよ。

やがてセブンイレブンにふたりは入った。なにも目的はないが、店内を物色する。森夫は耐えきれず、ワインを買った。

——おい、呑むんか？——小壘だよ。——丘を登ってゆく。小学校の裏手に来る。そこにはかの女の家がある。

いっぱい、転校してきたよな。

毎年、転校生がおった。

斉藤さんも5年のときに来たんやったな。

ほら、かの女の家やで。

森夫は恥ずかしかった。まるで失態を見せまいとする、芸人のように躰をちぢこませて歩いた。たしかにかの女の家だった。むかしにもなんどか、見にいった家だ。もとの道を帰るなか、不審げな眼差しで浪越は森夫を見た。

なんで、森夫はおれんとこ来たん？

おれら、それほど親しくもなかったやろ？

見抜かれてしまっていた。森夫のさみしがりな行いが。なんとも気まずい。でも言葉がなかなかでない。それでも冬日の逆光のなかで応えるしかない。

とにかく、だれかに会いたかったんだ。

森夫は過去にこだわり過ぎやで。

それは確かだった。正鵠を得ていた。森夫はなにもいえなくなっていた。やがて浪越のはなれで、ふたりはまたリビングルームのソファに坐った。画面のなかではまだサッカーがつづいていた。旗をふったサポーターがばかげた歌を唄っている。大合唱だ。くそだと森夫はおもった。

ところで、おれ、いまフットサルやってんねん。

そこでな、中学で一緒やった女の子がおるねんけど、

その子が島あかねさんの友達やねん、

それでその子が森夫ってどんなて訊いたんや。

なんかあったんか？

いいや、——と森夫はかぶりをふった。それでも顔はまた青ざめている。追いつめられた徒刑囚みたいに口をふるわせながらいった。——かの女はむかしかわいかったから、フェイสบックでそれをいったんだ。

「それだけか？」——と浪越はいった。それだけじゃなかった。映画にいかうとも誘ったんだ。しかも遠く神奈川にいるはずのかの女に。あまりにも愚かで、始末に追えない男だという事実をかれは知らない。

人妻に手えだしたらあかんで。

わかってるさ。

ずっとバーテン仕事やるんか？

やらないよ。おれは詩人だ。

本をだしてる。

そういつて鞆のなから本を取りだした。3年まえにだした初めての詩集だった。童話作家の森花行が序文を書いている。それだけが誇りだった。カントやニーチェ、フッサールにドストエフスキーを読んだという浪越は一読するといった。——意味はわかる。でも、だれにむかって書いてるのがわからない。——「読者だよ」とかれはいった。でも、かれに読者などいないのはどうやっても明らかだった。かれの文学はあまりにも自己装飾でしかない。そしていまいまいくらいにペテンだった。

これをだれに読んでもらいたい？

斉藤さんにだよ。

斉藤さんは読まないよ。

浪越がせせら笑う。これですべてが終わりだった。まるきりふたりの分断をなにかが嘲笑っているように森夫にはおもえた。ふたりが立ちあがる。扉をあける。ふたりして載った車を浪越がだす。そしてまた田尾寺の駅に送りだす。いきなり、「今年の夏、結婚するんや」と浪越がいった。——「おめでとう」と森夫は呟いた。それきりなにもいえなかった。ロータリーに降り立つと、もうあたりは暗い。

またな。

宿營地

*

ようやくたどり着いたとき、その家にはひとつの扉しか残されてなかった。黒い扉が立ってて、そのむこうには焼けぼつくりが広がり、おれたちの何人かは膝を折って、呆然とそれを見つめるか、うつむくしかなかった。おれはかまわずに扉をあけた。扉を支えてた薄い柱が炭化したまま立ち、扉のほうは倒れてしまった。うしろには砂漠しかなかった。渴いた咽を立ちのぼった煙が燻す。ここには花も水もない。おれたちは諦めて、歩きだした。足許に硬い感触があった。焼けただれた酒壇が数本、半透明の輝きを残して固まっていた。カティ・サークか、それともシロツク・ウォツカなのか、いまではもうわからない。

これからどうする？

スズケンと呼ばれる男がいった。企みはもともと、この男のものだった。おれたちの山はいつから始まったといっている。調布から女を脅して連れ去って、車のなかでことに及んだ。女は地元の組織の末端で、ヤサイの運び屋をやっているうちのひとりだった。女から金とヤサイと訪問リストを盗んで、おれたちは高飛びを決めるつもりで、集められた、まったく無関係の雑兵たちだった。金に困り果てて、てめえの孤独でマスを掻いてたおれには、その案件はまったくの吉報のようで、どぶ板のうえでかがやく鮭の筋子みたいなものだった。だのにおれたちが集まったときにはすでに、通りすがりの半グレ野郎から、組織に話がバレてたんだ。前金はたったの5千円。女はまだ生きてる。乗り棄てた車のなかで眠ってるはずだ。殺

しはまずい。サツは本気をだすだろうし、組織だっておんなじだ。それにおれは殺しただけはいやだった。その一線だけは越えたくない。たとえじぶんの身が危険だろうと。おれはそうみんないって、納得させた。——けれども、やはりそれがよくなかったのかも知れない。おれとおなじく集められたオグラという若い男がスズケンの背中を蹴りあげた。

なにしやがる！

瓦礫のうえを転がったスズケンがオグラを睨みつけるが、もはや最初に会ったときのぎらつきはなくなって、怯えの色が眼にある。オグラはなにもいわずにスズケンをいたぶる。両の手で襟首を掴んで、やつのからだを焼けた地面にバウンドさせてる。おれと、そしてもうひとりのシブという男は、ただそれを眺めてた。おれたち4人、もはや極まってしまったんだ。

おい、助けてくれ。

息も絶え絶えにスズケンがいった。——金もヤサイもリストもくれてやるから！——おれたちはだれも応えない。シブはやつの眉間を狙って唾を嘔いた。——こいつをやつらに引き渡そうよ。——どうやって？ もはや、全員の顔はわれてる。それに組織の本拠はスズケンしか知らない。けっきょく金とヤサイを三等分して、リストはどうしたものか、おれが持つことになった。おれたちはとりあえず、車を拾った。オグラが車をピックアップして、運転手を惹きつけ、隠れてるおれたちがそいつを引き摺りおろして、眠らせる。ただそれだけ。おれは玉川上水まで車を回し、そこでスズケンに電話をさせた。なにもかも、あいつにおつ被せるために。

*

ロープの代わりに後部座席にあったLANケーブルでスズケンの手足を縛った。調布の連中はこちらにむかつてるはずだ。

オグラがスズケンにたっぷりとヤサイを与え、酩酊させた。しばらくは動けまい。おれたちは車をはなれ、歩いた。久我山の駅にむかってだ。それから電車に乗って、吉祥寺で解散することにした。オグラはパスポートがないといって歎いた。東北にいくといった。シブはタイにいくといった。以前にも仕事でとちっていったらしい。みんながばらばらになってから、おれは身の振り方を考えた。これから長距離バスにでも乗って、でたらめに旅をするのもいい。おれは新宿でバスの予約をした。バスが来るのは23時だ。いまは7時。それまでの時間、なるべく大人しく、隠れてるほかはない。

おれは上品ぶった、『le chingasos』という酒場に潜った。寂れたビルの上階にその店はあった。おれは入るなり、窓の位置を確かめた。ここからなら、バスの操車場が見下ろせる。店員は太った女と、痩せたマネキンだった。真っ白い女のマネキンで、真っ白い陰部に裂けめがあった。そして真っ白い液体がどろりと流れでてる。

スコッチ・アンド・ミルクを。——おれは注文した。

じぶんで注ぎな。——女はろくにこつちも見ずに抜かした。

わかったよ。

おれは棚から酒をとり、冷蔵庫から牛乳をだしていい加減に掻き混ぜた。なんて店だ。窓際の席に坐って、酒を呑んだ。太った女は受話器を握って、しきりになにか訴えてる。なにかに脅えてるように見えるがおれにはよくわからない。床のうえを蜘蛛が這ってる。見たことのない蜘蛛だ。足が11本も生えてる。おれは踏みつぶそうとする。でも、力が入らない。おれの手が床を触ろうとする。その距離、77メートルもある。金色の豚。耳の奥から呻る水のような禽獣たち。絡み合った裸体がのしかかる絵画。具象と抽象を交差して、エドワード・ホッパーを夢想する分割販売された静恵たち、AからBへ、または林蔵から賢司へうらGaelひとみ、心臓が肥大してもはやバスに乗れないという幻想。やがて黒服の男たちが雨のなかからやって来る。おれは撃たれる。だってリストはおれのポケットに入ってたまんまだからだ。ブローニングが吼える。おもっ

たより美人だ。500階段を右折する、地栗鼠のようなひとびと、あるは人間そっくりの筏。来る、来る、来る、来る。殺す、殺す、殺す、殺す。ファック、ファック、ダック、——愛とはセックスの書きまちがい、かつてハーラン・エリスンがいったこと、書いたことのすべて。第3次世界大戦がはじまる。毒入りのガソリンを呑む男たちが見える。謀略。部隊のはじっこで銃口を見つめる射手、舞台のはじっこでスリッパを弾く衣装係、カフェ・ミューラーが始める。ピナ・バウシュが舞踏する。すべてはそのあいまの出来事に過ぎない。スリッパが弾かれる。涙。嗚咽する鯨。白菜の虫を殺すおれのまなざし。なおも止まらない人生、——足許を包む歓喜のファーレ！

「まったく、強情なやつだ」——だれかがいる。

「こいつには神経つてもんがないのか？」——だれかがおれの右腕を踏みつけにしている。

「——でもリストがあるんだ、もう否定できない」——おまえはだれだ！

「調布から玉川か、——ちんけな逃走劇だね」——男の顔がどうしても認識できない。

「さて、殺すか？」——やめろ！

それからさきは憶えてない。おれが眼醒めたときにはだれもいなかった。リストはない、金とヤサイだけがあつた。暗がりのなか、なんとか灯りをつけ、ジンジャーとCをコップに注ぐ。そいつを呑み乾して金をカウンターにおく。じぶんの足がゴムになってしまったみたいな感触がずっとつきまとうなか、歩き始めた。ビルの地階から砂漠が始まつてる。新宿の荒野をあまたの扉が乱雑に群れを成してる。おれはそのなかのひとつをあけて、向こう側へと進む。そして、ようやくたどり着いたとき、そこには扉しか残されてなかった。黒い扉が立ってて、そのむこうには焼けぼっくりが広がり、おれたちの何人かは膝を折って、呆然とそれを見つめるか、うつむくしかなかった。おれはかまわずに扉をあけた。扉を支えてた薄い柱が炭化したまま立ち、扉のほうは倒れてしまった。うしろには砂漠しかなかった。渴いた咽を立ちのぼった煙が燻す。ここ

には花も水もない。おれたちは諦めて、歩きだした。足許に硬い感触があった。焼けただれた酒壘が数本、半透明の輝きを残して固まっていた。カティ・サークか、それともシロック・ウォツカなのか、いまではもうわからない。

*

改行文字の入力はできません

*

環状線に乗って、じつくりと街を眺めた。そのとき、なんとなく覗いたタイムラインに頭のない女の死体を写したものがあつた。頭のほかはちゃんと服を着てて、それまで生きた人物だということがわかる。どっかの地方の事件を研究した、発禁本のページらしかった。投稿者のコメントで《閲覧注意》とあつたけど、こういった警句は役に立った験しがほとんどなく、小さな画像から、現実のいちばん辛い断面を見せつけられてしまうんだ。迂闊だったのかも知れない。それに見たからといって生活に差し障りがあるわけでもない。夜中におもいだして眠れないとか、飯が喰えないとか、房事に困るというわけでも、もはやない。

純真さは失われ、狡猾さがあとに坐つた。あちらこちらに転がってる他者の死や夢を突いてまわるといふことはない。でも、できるかぎり、それは避けたほうがいいと、経験がいつてるだけのことだ。おれはじぶんを裁く気にも、他者を憎む気にもなれない。列車やバスの周回にまかせて懐いを馳せてしまうことがあるだけだ。意味なんかない。関係などというものも、もちろんない。おれはおれひとりで、この生活をやりくりして、たまに訪ねて来る他者にばかりを見るだけの男だ。

かつての作家仲間たちは、もはやみんなひと言もなしに出世するか、筆を折って行方知れずになつていった。仲間だとかれらかの女らをまったく忘れてしまえる僥倖にはいまだ出逢つてもない。おれは黒帽子をかぶって地下鉄に乗つてた。若い女が指さしていった。――ほら、トンガリ帽子！――いったい、なにが愉快なのがわからない。酔つてるあいだになに

か、恥ずかしいことでもやつちまったのかも知れない。ほかにいろんなやつがおれになにかいい、あるいは嘲っては去った。それでもはやそんなやつらも街から消えてしまったよ。

いろんなやつらがいろんなことをいった。男色の老夫から舌を耳の穴に突っ込まれたこともあるし、医薬品の倉庫主任は「きみを正規雇用したい」と申しでてくれたりもした。都心の高架下でルンペンたちと、スピリタスで宴をしたことだってある。自称・やくざにケツの穴を掘られそうになったり、留置場でホンモノのやくざと仲良くやってたこともある。子供のころはどうだったか？ 小学校じゃあ、毎年いじめに遭ってた。いまおもうとばからしいものだったけど、おれはほんとうに傷つくことができた。こころというものがほんとうに胸のなかにあって、それが泣いてるのがわかったほどに。それでも経済が傾き、父の偏執狂と狂った家父長主義のなかに抛り込まれておれはこころも悲しみも失ってしまった。子供時代とは子供によって演じられる醜悪に戯画化され、誇張された大人たちの世界である。おれは父から授かった暴力性を家のなかで発揮し、やがて家の外でも発揮するようになった。おれはすべての女たちを軽蔑した。家のなかの階級にあって、それは永遠の不可触民だったし、まるで神の道化師みたいにふるまう姉や妹たちを敵視し、かの女らもあけすけにおれを侮蔑し、疎外のなかで黙殺しつづけた。おれはかの女らの犬を虐待し、うちなる猫たちに応えようとした。それでも、そんな戯れごとはなにかを伝えるにせよ、ものを書くのにせよ、ひとつも役に立ってはない。

「出所したら連絡する」と27のやくざものはいった。

おれが出所するとき、やつはまだ檻にいた。やつは出所したとたんに組から制裁が決まって、そのころは暗い顔ばかりしてた。おれのほうは起訴猶予で、またも病院送りだった。担当の老刑事がいった。

「家に帰ったら、おれに連絡くれ。話をしよう」——おれは電話なんかしなかった。

さまざまなおもいが回帰するものの、その流れのなかから物語を捕まえることはできそうになかった。環状線がもとの駅までひと回りした。おれは降りて、おれの街へ帰ることにした。雨が降り始めた。おれには傘がない。切符を買って、列車に乗る。空いてるところに坐った。仕事以外になんの取り柄もないような男たちにかこまれて窓を眺めた。20分で神戸にもどって来たわけだ。

語るべきことがどこにあるのか。社会的に失語症に墜ちたような気分がする。鼻の赤い犬が人間を従えて歩く。もはや、愛することにも鈍感で、ほとんどなにも感じなくなった。そもそも愛された記憶がおれにはない。ビルの4階の室で、秘書の手伝いを以て射精する男、むかいの養老院で、助けを呼ぶブザーを無視して、ベランダで莚を吸う男、女の愛を枕に肥える男、呼び声に応える女、応えない女、嘲笑う女、子供が虐待に遭ってても、一瞥しては素知らぬ顔で去ってしまう、化粧臭い女教師、子供が長時間、父親に折檻させながらも、素知らぬ顔でさっっていく冷たい母親たち。おれはだれのこともしゃなかった。ただそうとふるまってただけだ。愛せないものから愛を取りもどすための戦いがしたい。現実と空想の乖離が進むなかで、おれは疲れ果ててる。ほんとうは小説など書きたくないのかも知れない。どう足掻いたってじぶん以上のものなんかでやしないんだ。じぶんの複製品を創りあげ、それを切り刻み、近所にばらまく。できるのはそれだけのこと。遠くの丘を救急車が降りて来る。神が指を指す。火の手があがって、おれたち、ぜんぶなまえのない、なにかに変えてしまえばいい。じぶんですら愛せないもののための世界を、いまこそ出現せし給えよ。

*

ビートルジュースの喇叭呑み

*

おもえばあのときはひどく酔っていた。もちろん、そんなことはいいいわけにならない。けれども道中ずっと呑んでいたのはたしかだった。おれは過去から逃れようとする一匹の兎でしかない。そしてかの女は遠くの土地で、きっとおれを軽蔑しているだろうとおもった。——でも、——かの女こそがわが藝術のミューズであり、ファム・ファタールなんだ。——かの女がおれを拒絶したからこそ、——おれは詩をより多く書いたし、曲も書けた。——もしも、——もしもかの女がおれに好意的で、「いい友達でいましょう」などといわれていたら、おれはいまごろ骨抜きになっても書けなかったにちがいない。

——かの女の意味がどうであれ、——かの女がおれのイメージの原点であったことはあきらかな事実だった。

おれはあの日は朝から酔っていた。そして列車に乗った。神戸線から福知山線へ。尼崎から西宮名塩へ。そこでバスに乗って、北六甲台を目指す。西宮のやぼったい雲の許、どうしたものか、手前の養老院のまえで降りてしまった。酔ったまま、養老院で道を訊く。女たちがやさしく教えてくれて、おれはまたバスに乗った。バスが丘の上をゆく。おれは停車ボタンを押した。降りたおれをバスが追い越す。小さな砂塵が舞い上がる。そのなかを進み、理髪店のまえで停まった。そしてドアをあけた。テレビで見たことのある男がいた。福知山の事故で母を失った男だ。いまでは理髪店の主をしていた。

こんにちは、ナカタといいますが、

いまさらながらお悔やみをいいに来たんです。

男は戸惑った顔でおれを見た。当然のことながらだ。

小学生のころ、この店で髪を切ってもらってたんです、それで。

そうでしたか。

いちどあなたのお母さまに剃ってもらってるとき、

動かないでといわれたのに、動いてしまって、

切ってしまったこともありました。

あのひとはとてもやさしいひとだと記憶に残っています。

それはありがとうございます。

かれは引き攣った顔で答えた。おれはまわれ右ででて、北六甲台小学校にむかう。おれはずっと成人記念に呼ばれなかったのを怨んでいた。ほんとうなら、そこでかの女——佑衣子とも再会できたはずなのに。おれは担任を怨んだ。佑衣子との接点を破壊した男を。小学校の終わりちかく、かの女がおれにくれた、自己紹介のカードにおれは悪ふぎの替え歌を書き、そいつをやつが取り上げたんだ。そして「だれにももらったのか」を執拗に問い糾した。やがておれはかの女だといい、やつは、——浜崎はかの女を教卓に呼びつけた。おれの眼のまえで、かの女がなにかいわれている。でも聞き取れない。恥ずかしさと怒りでいっぱいになったおれはけっきょくいない存在にされてしまった。おれのカードだけが棄てられてしまったんだ。

いつかの夜、おれは小学校に電話をかけ、浜崎をだせとわめき散らした。いまとなつてはどうだっていい。それでもそのまま校舎に入って、職員室にいった。校長らしい小男がせつせと作文を書いていた。剥きだしになった男根が凋れた茄子みたいだ。

これは失礼。

あなたは？

卒業生で、作家です。

サッカー？

まあ、そんなところです。

なんのようですか？

吊りズボンを直しながら小男がいった。ほかの教師たちはみな授業中だ。やつはなにごともしなかったかのようにこちらへむかって来た。

'97年の卒業なんですが、浜崎先生ついでいまどうしてます。

あの方なら、数年まえに亡くなりましたよ。

九州で。

あ、———そうですか。

わたし、タイムカプセルの掘り起こしに呼ばれなくて、

心配してたんですよ。

やつはなにもいわなかった。おれはまたまわれ右だ。ほかにいくところもなかったから、寺島京成の家についてやろうとおもった。やつはおれから借りた子門真人のレコードを疵物にして返して来た塵野郎だった。やつの家のまえには車がいつも駐まっていた。やつを叩きのめしたい気分だったが、できなかった、呼び鈴も鳴らさずに歩いてゆくと、斉藤佑衣子の家があった。ここには1年まえにも浪越彬と通ったことがあった。あれから1年、まったく早いものだった。あれから数ヶ月

でバー・ロウライフの仕事は辞め、夜勤の倉庫で金をつくり、東京や青森、新潟へいったんだ。けれども、いつだってかの女が頭にあった。どうやっても忘れられないものがおれのなかにあった。まさに軛のようにかの女についてのおもいや、記憶がおれを縛りつけている。こんなにも溢れるおもいをどうすることもできなかったからおもわず、呼び鈴を鳴らしてしまった。酔って莫迦をやっているのは明らかだった。

もしもし、佑衣子さんの同級生のもんですが。

佑衣子はいませんよ、わたしはかの女の祖母です。

それでもいいんです。

かの女に謝りたいことがあるんです。

あとは訳がわからなくなった。玄関のまえで土下座をしたり、挙げ句には怒声をあげた。「みんなして、おれのことを莫迦にしてんだろう」とかなんとか、正直に言えばまったく憶えてない。もったいないことに。憶えていればもっと書くことがあったのに。やがて近所の男がやって来た。重度の肥満だ。瘡せる必要がある。

うるさい！

黙れ、おれは佑衣子にいつてるんだ！

佑衣子はおらへんのや！

警察呼ぶぞ！

おお、呼べよ！

パトカーがすぐにやって来た。酔いどれたおれは黙って乗り込んだ。警官どもはおれのアルコールに気づきもしない。車は有馬警察署ではなく、西宮警察にむかって走る。ずいぶんと遠い道程だ。やがて警察署に着いた。おれの始末がストーカ

「規制法に反すると決定されても、ずっと軟禁された。おれはなんどもジュースを呑んだ。ビートルジュースが飲みたかった。ところがどの自販機にもそれがないと来る。まったく泣ける話になりそうだった。おれは犯行理由を、「むかし、かの女にいじめられてた、謝って欲しかった」といった。なんともお粗末だ。——おれは過去から逃れようとする一匹の兎でしかない。噫。——そしてかの女は遠くの土地で、きつとおれを軽蔑しているだろうとおもった。——でも、——かの女こそがわが藝術のミューズであり、——ファム・ファタールなんだ。——かの女がおれを拒絶したからこそ、——おれは詩をより多く書いたし、曲も書けた。警官どもは怒るでも叱るでもなく、おれと一緒にテーブルを囲み、なにもいわないでいた。犯罪の臭いがどうしたものか、しなかった。これまでいろんなことでサツに捕まって来たものの、いまのはどうしてか、ずいぶんとのんびりしてしまっていた。弛緩した場面がひたすらつづく映画、緊張を失った芝居のごとく、人生がつづいてゆく。夜も更けてから、お偉い方がいった、——「きみを家まで送る」と。なんとも贅沢な処遇だった。だって、とてもこの警察署から家まではもどれなかつたから。若いのと、老いたのとがおれを高速まで使って送った。帰り際、若い警官がいった。——「きみは作家なんだって？ 本はでてるの？」と。

キンドルでだしますよ。

じゃあ、チェックしておくね。

最初から最後までおれが酔ってることに、だれも気づかなかつた。おれは冷たい扉のむこうにある、わが室に入った。それからまた酒を買って、呑み直した。まったく、恥ずかしいかぎりだった。これでまた佑衣子には貸しができた。おれはもうかの女のことを書くまいとおもった。それでもそれからの4年のあいだ、いつたい、どれだけかの女のことを書いてきたのか、わからない。この掌篇にしたってそうだ。おれのなかでひるがえる宇宙——それが佑衣子だった。燃えるような男の内奥を照らしてくれる幻想、それがかの女だった。繰り返すキックと、直線的なベースのライン、南無阿弥陀仏を唱える方

法、ありとあらゆる索莫のなかを現れては消える影、それもみんな佑衣子の仕込んだ罠だった。おれは辞のなかで瞑目する。それがかの女へのサインだ。

はじめてきみを見てから、きみがずっと好きだ。きみの短い黒髪、少年性、そして膨らみ過ぎた乳房も、遠い静かな故郷の歌のように、なにもかももうそこに染まってしまいうまえに、もう1度、おれを罵ってくれ。ただそれだけの夢のような小説を描こうと疾駆する馬たちが、8番レースの終わりで、しみじみと落馬を起こそうと足掻くのだよ。

*

過去と現実

*

おれはかの女の、懐かしい歌声を聴く。BONNIE PINKの『過去と現実』だ。冷たい声が室に閃く。ここは'22年のこの神戸で、おれは過去に書いたいくつかの掌篇小説に眼をやっていた。なにかもがだめだった。きのうは無呼吸症に悩まされ、それが酒のせいで悪化しているということを知って禁酒していた。それと父から仕事の依頼があつて、その先払いがきよう入るといつて待った。そしてサンプリントという印刷屋に任せていた音楽ジャケットを見る、以前につくってもらったものとはちがい、裁断もされてもない、ひどい出来だった。それらのことで、ひどく打ちのめされ、禁酒をやぶつて吞んでしまつていたからだ。掌篇はろくに物語を語っていなかったし、描写も状況設定もあまりに杜撰極まるものだった。おれはいつも急いてしまい、肝心なところを書き逃がすばかりで、いつもいつも師匠には「小説とは徹底して説明なんだよ」と鞭打たれてしまつていた。そして書いたばかりの代物もろくすっぽ推敲や校正もしないままに書き散らしてしまつていた。室の黒黴が臭う。10月の夜にこうやって綴るのはすべて過ぎ去ってしまった時間についての考察ばかりだ。いったい、どれほどの時間がおれの頭上を飛び去つていったのか？ 37にもなつておれはひとを傷つけてしまつたうえに、それをまた物語にしてみよう。こんなできそこないの冗談ばりに生活は進み。やがてはその生命を終える。

*

あれは去年の11月の暮れだった、文藝同人をやっている青年がこちらに訪ねて来た。おれより7つも若い。片手にはホイットホースをさげてだ。かれとはもう6年もまえに出逢っていて、ネット上の文藝仲間のひとりだった。まえに2度もかれに泊めてもらった。東京は中野の四畳半でかれは暮らし、そして1冊の本をだしていた。正直、おれはかれの文章が「使いものにならない」とおもった。観念的で、なにをいっているのかわからない文章がつづいていて、かれのいうように「国語教師みたい」な評をした。そしてかれと著作を交換して、おれはおれの旅をつづけたのだ。青森の三沢、そして新潟の美佐島へと。

おれには話せることがなかった。だからかれに話をさせた。かれの海外体験を聴きつづけた。一見して育ちのいい、国立大生のようなかれはじぶんの麻薬体験について語り始めた。まったくおれにとって魅力のある話題である。

LSD、ホテルでやったんですよ。

なにか見えたの？——おれはそいつを期待した。

いいえ、なにも。たまに床の木目が見えたりするだけで。あとは眠れなくなるだけの薬ですよ。翌朝、「ベッドが硬くて眠れなかった」っていつて、ボーイと喧嘩したんです。あんまりおもしろくなかったですね。

へーっ、じゃあ、すると大麻は？

かれは一瞬、顔を明るくさせて微笑む。

「いいですよ」——大麻やったあとに、みんなでゲームをするんです。映画観たあと、それぞれクイズをだすんです。「あそこがどうだったか」とか、「あそこでだれがなにをいったか」って。

それがおもしろいの？

ええ、おもしろいですよ。

その感覚、わからないなあ。

かれは日本でも大麻をたびたび使うらしく、そのことを嬉々として話す。入手経路はどこなんだろう。おれだってやってみたかったんだ。早いこと、政府がかわって解禁されるのをおれは心の底から願っているひとりの莫迦だった。

Twitterですよ。

やっぱ、ヤサイって書くの？

「ええ」——それで千葉の田舎の駅まで行ってプッシャーと会うんです。プッシャーってわかります？ 最近、連絡つかないんで、もしかしたら捕まったのかも。

そこで、おれはおれの話をした。何年もまえに留置場で、相室のやつが大麻をじぶんで育てていると話した。そしてじぶんで育てると愛情が湧くなどと告白したことを。かれはまるでまさに草をヤッているみたいに話す。室の灯りに照らされた顔がだんだんと赤みを帯びてゆくのがわかった。

栽培してるひとつっていちばん偉いんですよ。

でも、だれにも明かせないからすごい孤独なんですよ。

あいつは孤独には見えなかったがね。

それから、かれの話がつづいた。親の金でインドにいったとか、そこでの事情がどうだとか、あるいは沖縄での現状をおれにいつて聴かせた。なんとも愉しそうだったのを憶えている。しかし、かれはいつたいなに書いているのか。あれはただの概念もどきではないのか、いったい、これからなにを産みだそうというのかが気になる。

沖縄は、米軍から直接入って来るんで、ヤク中だらけなんですよ。沖縄のひと、みんなやってますよ。これからタイ

に友だちといく予定なんです。

なんだか金を持った蛮族たちの群れが想像できるような気分がした。みんながみんなきれいな身なりをして、天使の安息日に火をつけるさまが見える。

大麻にもいろんな品種があるらしいけど、タイの大麻は？

最高です！

ワッハッハッハ!! —— おれたちは哄笑を叩きだす。おれは廊下にでた。注文した荷物が届いてた。それを持って室に這入り、函をあけた。米焼酎の『吟醸しろ』だった。Amazonのポイントで買った。金がないときはアンケートのポイントを遣い、酒を買うのが常套手段なんだ。

おれが用意した酒だよ、やってくれ。

ええ、これっすか？

呑むと、かれは一口飲んで噎せてしまった。そして顔を歪め、「これはだめだ」とつぶやいた。かれの室に焼酎があったから注文したのに、かれにはだめだったらしい。

わるかったな。

いえ、いいんです。

麻薬ばなしも、やがて尽きてしまった。おれは沈黙がきらいだった。だれだって苦手かも知れない。他者とそいつを共有するのは特別に。

いま、なに書いてる？

いまでもですか？

いや、ようやく日記を書きはじめたところで。

なんだって、なにも作品を書いていないのかとおもった。あれだけの話があって、それをエッセイにもしていないなんて、おれには信じられなかったんだ。

さっきまでの話、それこそ小説にすべきじゃないの？

いや、あれは、その……。

やがてほんとうの沈黙が訪れた。もはや夜だった。生田町の暗がりに子供の声が遠ざかる。やがて若者たちの声が近づく。

そとでなにか食べませんか？

おれたちは外套をまとってそとへでた。地下鉄で街に降りて、飲食街のほうぼうを歩き廻った。サンキタ通りはきれいに改装されたものの、客引きの鬱陶しさは変わらなかった。品のない顔がおれたちを囲んだ。けつきよく、かれの望みで南京町へむかった。そこも客引きは最低品だった。1軒撰んだ。かれは北京ダックを注文した。ふたりで喰う。つぎはスープだ。最期にパイカルを呑んだ。興味を惹かれてかれも呑んだ。そしてかれが会計を済ませ、そとへでる。もちろんぜんぶ、かれの奢りだった。おれは作品を与え、ひとびとはおれに酒や喰いものを与える。西安門のまえで、ふたりベンチに坐りながら夜景を見た。もう20時だった。たった半時間で、あたりは暗くなり、わずかな若者たちが屯しているだけだ。

このへんの店って、閉まるの早いですね。

ああ、あまり人気はないんだよ。

ふたりして阪急の駅までいった。改装された広場は一見見てくれがよかったものの、物陰に隠れた酔漢たちが嘔吐していた。ベンチも庇もコンクリートの味気ないできもので、ところどころに罅がある。できたとたんに穢れている。まったく、ろくでもないものをつくりやがった。

ナカタさん、また来てくださいよ、

いまは室もきれいにして寝られるようにしてますから。

寒風のなかで涼しい顔をしたかれが去る。手をふってみた。かれは気づかない。やがておれも帰って、残った酒をしたたかに呑む。じぶんのなかでなにかが芽生えるのを感じてしまい、それをそのまま書く。そして、この顛末を掌篇としてもものしてすぐだった。かれから絶縁されてしまった。迂闊だったのはたしかだ。かれはおれに掌篇を消すように告げた。「これは不味いです。消したほうがいいです」。しかし、その伝言に気づいたときはもう遅かったんだ。かれはSNSのアカウントをみんな削除して消えてしまった。申し訳なくはおもう。もうかかわることもない。けれども、おれたちは作家なんだ。かつてジイドがいったように作家は餓えた獅子と子羊をつくりだす。そしてかれ自身が獲物を捕らえるけものとなって、走りだしてしまうのだと。

過去に生きる多くの人は

現実を信じていない人

おれだって、そんな人間のひとりなのだろう。でも、少なくともおれが作家がどういう人種かを知っていた。多くのひとのなかで、たったひとり獲物を狙うけものなんだと。おれはいまこうして散文をつづっていて正直、うれしい。おれにはまだ書けることがあるからだ。たとえ人間として最低品だとしても、作家として飛べればいい。かれには非情さがなかった。かれにだってチャンスはあった。おれを蹴りあげることが充分に可能だった。だのにかれはおれを狩らなかった。人間が好ましいことと、作家として好ましいことはちがう。

そうしていま、おれは階下に降りて行って、郵便受けを見る。おれの読者が、庇護者がひとり、死んだという報せだった。共通の知人からだった。かの女の死を報せるつもりだったが、電話が繋がらなかったと。たしかに電話は変わっていた。でも、早く知ったところで現実が変わりはしない。かの女もまた好ましい人間だった。善性をもった文藝仲間のひとりだった。かの女がいった、おれへの賛辞がみなむなしく散ってしまう。明滅して消失する。もしかしたら、おれに存るのはスカスカの、安っぽい人間性で、作家ですらないのかも知れない。そして何者かに追われる獲物みたいに、山麓パイパスを南下してゆく車たちの警笛に囲まれながら、たったひとりで坂道をくだるしかなかった。そしてたどり着くところにはただ海だけが存在していたんだ。

*

※作中の歌詞はBONNIE PINK『過去と現実』より引用。

夜でなく、夢でもない。

*

屈辱の痼^しりを解きほぐしてくれるような他者がいない。積年の悪夢、そして中年の危機がわたしを追いかけている。なんだって、そんなていたらくに墜ちてしまったのか。じぶんの手を汚してまで生きてきたせいかな、もはや他人のおもいを汲みとってやる情というものが非情へと変わる。わたしは臆病者、そして闖入者である。アルコールなしの生活をようやく1年過ごした。それはわたしが死ぬための準備だ。

さつきまで障害者支援センターの担当者が坐っていたスツールに腰掛ける。そしていままでやってきた表現の世界についておもいを巡らした。わたしは無名の作家だったし、歌人だった。せまい世界のなかでしか通用しないものを書き綴ってきた。あらゆる新人賞とは無縁だったし、結社や同人にも無関心だった。ひとと和合することがなりよりも苦手だった。

もうじき夜が来る。早いことことを済ませようとおもった。しかし、まだこの世界に未練があり、そしてじぶんの創りあげたものが愛おしかった。決してだれにも好まれない被造物の塊りのなかで、ただひたすらに言葉だけが踊っている。わたしにはなんら使命はない。ただじぶんを肯定できない憂さを晴らそうと、虚勢を張ったものを書くだけだ。電話が鳴る。わたしはでない。目的を喪った躰が拒絶するからだ。

とうとう罨に嵌まったらしい。くだらない感傷の染みついた指で、またもキーを叩いている。これじゃあ、切りがない。いままでの交流に終止符を打つべく、手紙をしたためる。1通、2通、3通、やがて26通もの手紙を書いた。虚しいばかり

だった。しょせんひとはみずからが創りだしたもののなかでしか生きられない。呼び鈴が啼いた。扉をひらくと警官がふたり立っていた。

区役所からの通報で来ました。

あなたですか、自殺すると電話したのは。

そんな電話はまだしていないし、まるで憶えがないことだ。

いいえ、そんな電話してませんよ。

嘘はよくないですよ、檜崎さん。

こちらではもう確認がとれてるんでね。

いったい、どこに確認を？

それはいえません。

さあ早く、下の車に乗ってください。

はあ、わかりました。

ちょっと待ってください。

財布と鍵を持って階下へむかった。パトランプの消えたパトカーが1台駐まっていた。男たちはわたしの背中を支えるように手をかけている。そしていっぽうがドアをあけ、いっぽうがわたしを押し込んだ。やがてふたりは前部坐席にいき、エンジンをかけてスタートを切らせた。たどり着いたのは埋立地で、そこには1台の机と、PCがある。そして書きかけの文章が表示されてあった。まぎれもない、それはわたしの遺書だった。

さて、作家さん、あんたの死に際を看取ってやるんだ。

書けよ、あんたの最後のおもいをな。

ほら、早く坐れ！

ひとりの警官が銃を抜いた。初めて見る。ニューナンプ M60 の銃口だ。ところで、ニューナンプ M60 は、ウィキペディアによると《新中央工業社製の回転式拳銃》。'60 年より日本の警察官用拳銃として調達が始まり、その主力拳銃として大量に配備されたほか、麻薬取締官や海上保安官にも配備された。生産は '90 年代に終了したが、現在でも依然として多数が運用されている》とのこと。

わたしはすっかり観念してしまっていた。痺れるような感触を背中にして、椅子に坐り、PC のキータッチを確かめる。いい感触だ。深いキー・ストロークがなんともいい。わたしはいともたやすく遺書を書いた。それはこんなものだった。

*

これがひとに読まれているということはわたしが死んだということだ。もちろん、この紙片は法的拘束力のない、ただのざれごとに過ぎない。しかし、わたしはわたしの存在について少しでも始末をつけておくためにこれを遺す。

わたしの人生は、索莫そのものだったといい。多くの犯罪、多くの暴力、多くの卑語・猥語、無知の露呈、過剰な発言は幼少期に発露した疎外、暴力、無愛の賜であり、尚且つわたしの虚無を隠蔽するための行為だった。いまやわたしは長年の愛着障碍、アルコール嗜癖、浪費と蒐集によって葬られようとしている。わたしは愛を知らず、友を知らず、そして精神的な充足もなく、ほとんど多くをその場限りの刹那的な消費と表現で補って来た。しかし、それもはや終わることにただただ喜びを感じるだけだ。想像して欲しい、家族愛も周囲の理解もなく、ただじぶんの問題にふりまされた挙げ句、ア

ルコールの魔の手に掴まれた、無知な男がじぶんや他人でできることはただべつの問題をつくりだし、それを口実にすることでつねに本質から逃れることだ。じぶんを注目に置こうと無益で無残な花を散らすことだ。満足な知力も、基礎学力もなく、学歴もなく、人間関係も不在ななか、できることはただつくることだった。みなにわたしの虚無を識ってもらうために、気づいてもらうために。わたしはただ寂しかった、心から充たされたかった、愛に触れたかった、できることはなにもなかった。家庭内の孤立と、社会での孤立、片思いと失恋、社会人としての逸脱、みな望まぬものが襲来した。親の無責任な多産がわたしを経済的に追いつめ、肉体をも締めあげた。そして徒手空拳のまま、社会へと送られ、わたしはわたしらしくないところをただ迷った。多くのひとがわたしに怒りと軽蔑、嘲笑を捧げた。心は蝕まれ、怒りと憎悪で充たされた。本来、学びたかったことも遠ざかり、なんども煮え湯を飲まされた。そしてその憎悪が28歳で爆発した。心は手遅れだった。いまとなつてはなにもかもがむなし。みながわたしをきらった、みなが去ってしまった。といってもかれらはわたしの作品など、わたしの虚無など欠片も識らないが。

個人的な憎悪にはもう用はない。ただこの展望を失った道の半ばで、わたしはこんな男でも救われたいと願うだけだ。13歳からずっと抱えていた空想をきのう断捨離した。だれかがわたしを観ているという空想だ。あるいは思考を読んでいるというものを。いつも特定のだれかをおもい浮かべたものだ。しかし、それはわたしという無色の、乖離した自我に、他者という色を塗ることだった。ひとりでいるとき、ずっとあたまのなかには他人がいるとおもいこんでいた。学校のだれかとか、職場で一緒だったやつらとか、わたしはかれらかの女らを愉しませようと演技していた。ずっと、ずっと、ずっとね。ほんとはわたしの心のうちを識ってもらいたかった。わたしに興味を抱いて欲しかった。わたしもけきよくは「心は淋しい狩人」だったのだ。

わかりあえないもののなかにいて、ただ声を奪われて、わたしは舞台に立っていた。長い芝居だった。もはや、すべての

ことがどうでもいい。古い野心が胸から両手から零れ落ちてゆく。こうなるとわかっているのなら、少しでも清潔で、勤勉で、過ぎ去るものに笑みを送ってやればよかった、もちろんアルコール抜きで、だ。

*

書き終えるころには朝が近かった。だが警官たちは微動だにしない。拳銃はわたしを狙いつづけたし、わたしはまたもじぶんの世界に陶酔していた。じぶんの創りだすものに酔っていた。

よし、それでいいだろう。

最後の晚餐というじゃないか。

われわれはまたしてもパトカーに乗った。そして明け方の街を疾走した。

なあ、あんた、ずいぶんと落ち着いてるじゃないか？

おれたちがあんたの希死念慮をどうやってキャッチしたか、知りたくないのか？

わりと、どうでもいいね。

もう死ぬんだから。

でも、まるで死が先回りをしてるようだね？

ふたりは目配せをして噛み合った。胸糞がわるくなる。

もちろん、おれたちの正体は死そのものだからな。

いままでに大物小物にかかわらず、死を願ったやつらを殺して喰って生きてきたんだ。

おれたちは人類の心のなかに棲んでいる。もちろん、きみのなかにも、きみの愛しいひとたちのなかにもだ。

やつらは制帽を脱いだ。顔がなかった。黒い霧の塊りが漂っているに過ぎない。わたしは慄然とした。でも、それをおもてにはださなかった。だせなかった。この車はいい、どこにむかうのだろう。最後の晚餐とはなにか。いろいろと疑問は尽きなかったものの、なにかから話せばいいのかわからなくなっている。

まずは酒にしようぜ。

もう1年も禁酒だったんだろ？

終夜営業のリカーショップで車が駐められた。おれはたったひとりで酒を買った。ジンジャーワインのストーンズとシロツク・ウォッカだ。口のなかで唾液でいっぱいになる。飲酒の欲求で脳髓がはち切れそうだ。たしかに1年は長かった。しかし、実際に酒を手にとってみれば、そんなもの一瞬のように感じられる。

なにが喰いたい？——いや、そんなことはわかってる。

この時間は鮎屋なんか開いてないよ。

心配御無用！——いい店があるんだ。

運転しているやつがなにかのボタンを押した。すると、車体がゆっくりと浮上し、そのまま空を貫いた。心臓が倍になったような感覚が襲う。腕時計の針がみるみる上昇する。そして強い衝撃で、わたしは気を喪った。気づくと、車から降ろされ、わたしはかつてのように『江戸前握り えびす』のまえで立っていた。黒い霧がわたしをとりまいていった。「金はおれたちがだす。あんたは好きなだけ喰えばいい」と。店は開店していた。わたしは入る。そして1時間ばかり喰い尽くした。気づくと霧はその姿を警官に変え、おれをまた車に乗せた。そしてそのままアパートにもどった。室まで連行されながら、わたしはだんだんと死ぬのが厭になってしまっていた。

作家さんよ、死ぬ気をしっかり持って生きろよな！

そうだ、おれたちが憑いてるんだからな！

これはわるい冗談にちがいない。だいたい死がなぜひとのかたちをして喋ったりするんだ？ そんなものに必然性があるものか。わたしは腹が立って来た。室のなかには尊厳死のために用意した、ヘリウム・ガスがある。チューブや、イグジット・バッグもある。やつらはおれに酒を差しだす。とりあえず、ストーンズをロックでやった。死にかこまれて宴に興じた。そしてシロック・ウォッカだ。葡萄からつくられたフランス産の酒だ。大変美味だった。睡眠薬を3週間分嚥んだ。バッグをかぶる。チューブを差し込む。バッグの口を縛り、ベッドに横になる。死がわたしのモジュラー・シンセをしずかに鳴らす。もうひとりの死がガスのバルブをひらく。やがて意識が遠のき、酸素がなくなり、わたしは死ぬ。死ぬ。死ぬ。死んだ。

カーツト!!

もういいだろう！

そうだな。

照明をつけて！

死ではない、なにかの声がひびいた。わたしが眼をあけて起きあがると、見も知らない劇場にいた。とても古い建物で、内装はひどいものだった。罅や汚れ、黴や、死の臭いがした。明るい照明のなかから男たちがやって来る。

いい演技、いい人生だったよお。

え、———そうですか？

ホントホント、いままでいろんな死を監督してきたけど、これはモノホンだねえ。

ありがとうございます。

おい、ミホちゃん！

メイク室に案内して！

「はあい！」という声がして、そのミホちゃんがやって来た。ハタチ前後の女の子で、なんだか愉しそうだ。駈け足でやって来て、わたしをメイク室に連れていった。そしてわたしの顔から死に顔を拭い、衣装を替え、別室に連れてゆく。長い廊下を、真っ白な廊下を歩いていったときは第3スタジオと書かれていた。なかを覗くと数千ものひとびとが群めいている。ミホちゃんがわたしにアコーディオンを手渡す。

みなさん、もう演奏の準備に入ってますから。

え？

榎崎さんもみなさんと一緒に演奏してください。

おれ、アコーディオンなんて触ったこともないんだけど。

大丈夫ですよ、ここ地獄なんです。

そういうと、ミホちゃんはいなくなった。というか、消えた。なんやねん、これ。なにが大丈夫やねん。わたしは老若男女とともに列に加わった。指で鍵盤を叩く。まるでじぶんの思念に従うように楽器はわたしの思い描くとおりの音を奏でている。なんてこった。やがて全員の思念が一致してひとつの音楽になる。わたしは——いや、おれはもう虚飾を脱ぎ捨て、一心に弾く。美しすぎる情景がスタジオに広がる。でもこれは夢じゃない。おれの頭に仕込まれたキーボードとPCにひとつの物語が書き込まれてゆく。なにかもまったくあざやかな色をして回転する。ミラーボールと心臓がまぐあい、そして同一化する。いままでになかった演技論、映像論が生まれ、カメラがパンニングを繰り返す。法衣を来た撮影隊が特殊効果を醸す。おれたちは決してひとりではないんだ。『崩壊概論』も『敗者の祈祷書』もいまや必要にない。まばゆいばかりの光

りがスタジオを包み、死のもつとも明るい場所で疾走する。いまや、おれに見えるのはかつての人生ではない。現実の死だ。そして自我が消え、超自我へと変わるだろう。みながみな量子としてぶつかりあい、あらゆる悲しみを突き破って、エネルギーの点に変わる。おれの夢、おれの所有物、おれの作品、おれの日記、おれの室、おれの死体、おれに科せられたあらゆる裁き、そんなもの、もはや、どうだっていい……。

*

著者來歴

*

'84年、兵庫県西脇市に生まれる。神戸市出身、在住。夜間高校卒業。仕事と住所を転々とする。'04年より詩人・童話作家
||森忠明に師事、文藝を学ぶ。'12年、音楽作品『open all night/for missing person』を発表。'14年、出版局『a missing pe
rson's press』を主宰し、詩集『38wの紙片』を発表。以降、同局より作品を発表。現在、歌誌『帆(han)』を立ち上げ、歌
人として活動中。

*

夜でなく、夢でもない。

著者・編集・装丁・発行人＝中田満帆

発行所＝a missing person's press

発行日＝2023年12月25日 改訂第2版発行

兵庫県神戸市中央区生田町1-1-13 新神戸マンション北館303号

[電話] 078-200-6874 [mail] mitzho84@gmail.com

Printed in Japan